
貧乳LOVE

五月もちこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貧乳LOVE

【Nコード】

N8881E

【作者名】

五月もちこ

【あらすじ】

じつは貧乳なのに、ブラジャーはCカップを着けている桜井夕菜。あることがきっかけで偽ることをやめるが、憧れの夏木俊也の態度がどうもおかしい。ラブコメです。

0・ブローグ

私には貧乳というコンプレックスがある。

中学時代から胸が全く成長せず、現在高校3年生。

Aカップで貧乳などという人がいるが、私からしたらAカップなんてある方だと思う。だって、私はAAAカップ。普通のお店には置いてないサイズだ。取り寄せてもらったり、通販で買ったたりしないと手に入らない。やっと手に入ったと思っても、試着して買わないので、サイズが合わなかったりする。

どうせ合わないのならば、半ばヤケクソで、私はCカップを着け出した。もちろんスツカスカなので、パットを詰めまくって。

0 プロローグ（後書き）

ゆっくり連載予定です。

1. いきなり失恋

「桜井さんて、彼氏いるの？」

「えっ？な、何で？」

「5組の田中がさ、桜井さんのこと気に入ってて、それで彼氏いるか聞いてくれて頼まれてさ。あ、ごめんね、急にこんなこと聞いて。答えるの嫌だったら言わなくていいから」

「あ、ううん。彼氏はいないけど・・・」

何だ、ガツカリ。てつきり、夏木くんが私に気があるのかと思っただ。友達に聞いてくれて頼まれたのか。

偶然近所の本屋で夏木くんと会って、それだけでも幸運なのに、夏木くんも私の事が好きだなんてそんな都合のいいこと有り得るわけない。

「じゃあ、彼氏いないんだったら、田中のことちょっと考えてみてくれないかな？」

ああ、絶望的。好きな人に他の男を紹介されるなんて。

失恋決定だな、こりゃ。

そんな私の想いなんか知る由もない夏木くんは、爽やかに私に微笑みかける。勉強もスポーツも出来て、人当たりも良い優等生の夏木くん。もちろん顔もカッコイイ。パーフェクトだ。

好きになったのは、高2でクラスが一緒になって、たまたま席が近くなつて、会話するようになってから。夏木くんも私と同じ推理小説好きだったことが判明して、本の貸し借りをするような間柄になり、いつの間にか夏木くんに恋をしていた。元々私は面食いだ、それだけで惚れたわけではない。彼といると楽しいし、優しい気持ちになれるから。

残念ながら、高3のクラス替えで別々のクラスになってしまったけど、本の貸し借りという交流が今も続いているので、たまに会える。本当は毎日会いたいけど、ウザがられたらと思うと、ある程度

の距離を置いてしまう。

告白する勇氣はない。夏木くんはモテる。しかしどんなに可愛い子でも、どんなに綺麗な子でも、何故か夏木くんは振ってしまふ。私なんか告白するまでもなく絶対無理だ。今のこのお友達ポジションで満足しなきゃ。

「ごめん、私、今誰かと付き合おうとか興味ないんだ。田中くんも知らないし」

「じゃあさ、田中の写真ぐらい見てやってよ。もしかしたら少しぐらい興味湧くかもしれないよ？」

ニツコリ微笑んで、私の返事を待つ夏木くん。惚れた弱みだろうか、私は夏木くんのお願いを断れた試しがない。ま、そんなに無理なことを頼まれたこともないけど。写真を見るぐらいはいいかな。

「お、お邪魔しまーす」

夏木くんのお家にお邪魔することになってしまった。写真は学校に持ってきてくれるのかと思ってたんだけど、家が本屋から近くだし、ちょうど本も貸せるからってことで。

その本は前から私が読みたかった本んだけど、辞書みたいにぶ厚い本でそれを学校に持ってきてもらうのはどうも申し訳なくて、今まで遠慮し続けていた本だ。

「兄貴が部屋で寝てるだけで、親はいないからそんな緊張しなくていいよ」

夏木くんはクスツと私を見て笑う。

恥ずかしいな。何、緊張してんだろ私。友達の家に来ただけなのにね……。それに夏木くんは私の事、何とも思っていないし。

「飲み物取ってくるから、適当に座ってて」

大きい本棚にぎつしり並べられた本。本以外に目に付くのは勉強机とパソコンとベッド。黒とグレーを基調にした部屋で、男の子の部屋って感じた。ちゃんと整理整頓されてて、夏木くんらしい。

「はい、オレンジジュースしかなかったけど」

「あ、ありがとう。うわっ」

夏木くんが差し出したグラスに手を添えた時、思いがけず夏木くんの指に触れてしまい、動揺して手が滑った。オレンジジュースは見事に私の胸にこぼれて染みを作った。

「大変だ。早く洗わないと！」

うわあ、私って何てドジなんだ。幸い、高そうな絨毯にはこぼれてないけど。

「とりあえず俺のシャツに着替えて。洗濯機ですぐ洗ったらきつと染みにならないよ」

ドジな私に引くわけでもなく、いつもどおり優しく接してくれる夏木くん。やっぱり夏木くんは完璧だね。

脱衣所で服を脱ぐ私。大量にこぼれたジュースが胸のあたりから全然垂れずに済んだのは、やはりそうかと溜息が出る。ブラジャーの中に詰め込んだパットがほとんど吸収していたのだ。どとどとしよう？

このブラジャーとパットも洗濯したいけど、洗濯しちゃうと今着ける物がなくなってしまう。貧乳だってバレてしまう。

いや、バレたからどうだっていうんだ。どうせ、夏木くんにとって私は恋愛対象外。

実はCカップを着け続けることが、自分を苦しめていることに気付いていた。恋愛に積極的になれないのは、自分を偽っているという負い目があるからだ。夏木くんを好きになる前に誰かに告白された時も、この人は私の胸がニセモノだと分かっただらどうするだろう、そう思うと付き合えなかった。

よしつ。気合いを入れて、ブラジャーとパットも洗濯機に入れた。
これで後戻りはできない。どうにでもなれ、だ！

とはいえ、洗面台の鏡に映る自分の胸を見て情けなくなる。小学生並じゃないかな？最近の小学生は発育が良さそうだから、それ以下の可能性もあるけど……。

1・いきなり失恋（後書き）

これから夏木くんが壊れる予定です。

2・夏木くん壊れる(前書き)

この小説のタイトルをクリックした勇者の皆様、まさかエロが嫌いな方はいらっしやらないと思いますが、今回ちょっとだけエロいのでご注意下さい。

2・夏木くん壊れる

「ごめんね、迷惑かけて」

ドキドキしながら、夏木くんの部屋に戻って座った。何となく膝を抱えて、三角座りで胸元を隠す。いきなり堂々と胸元をさらす勇氣はなかった。

「熱い飲み物じゃなくてよかったよ。火傷なんかしたら大変だし」
迷惑そうな素振りは全く見せず、夏木くんは柔らかく微笑んだ。

優しいな、夏木くん。こんなに優しい夏木くんだったら、私の胸がサイズダウンしようと気にしないよね？友達なんだし。

そもそも夏木くんは私の胸の大小なんて、全く気に留めてないんじゃないかな？夏木くんはそのへんのエロ男子と違って、綺麗な心の持ち主だ。夏木くんがエッチな事なんて、考えるはずもない。

しばらく最近読んだ本の感想を言い合って、会話を楽しみ、緊張が解けた時だった。私は無意識に三角座りを崩し、足を伸ばしていた。

突然、夏木くんの動きがピタリと止まる。会話も途切れた。

「でね、真犯人なんだけどね、じつは」

私が無理に話を続けても、全然聞いてくれない。どうしたのだろう？

「夏木くん？」

夏木くんの視線の先を辿ると、私の胸だった。私の胸を見て、夏木くんが固まっている。

そうか、貧乳に気付いて驚いたのか。夏木くんでも胸を気にしたりするんだね。私はちよつと悲しくなった。

私が膝を抱えて胸を隠すと、夏木くんは我に返ったようで、顔が赤くなっていた。純情少年のような反応に私は気を良くした。そうそう、夏木くんはこうでなくちゃ。

「あ、あ、あのっ。何ていうか・・・」

夏木くんはきつと謝るつもりなんだろう。でも恥ずかしくて何て言っただけでいいから、目が泳いでいる。そんな感じだ。

私は母性本能がくすぐられた。

「私は気にしてないよ。さっきの本の話の続き、しよ？」

「あつ、いや、違うんだ。その・・・」

「何？」

彼は一体何が言いたいんだろう？赤面して、アタフタしてる夏木くんって、何だか可愛いし、ちょっと待ってみるか。

私は夏木くんの言葉を待った。ややあつて、意を決した夏木くんが口を開く。

「・・・胸、触らせて」

「はいいつ？」

『胸、触らせて』って、えーっ！？幻聴？

夏木くんからそんなセリフが出るなんて有り得ない。

呆然としていると、夏木くんが近付いてきて、私の胸を隠していた膝を強引に伸ばしてしまった。再び夏木くんの注目を浴びる小さな膨らみ。そんなにジロジロ見られると恥ずかしいんですけど・・・。

「ちょっとだけでいいから。服の上からでもいいから、ダメかな？」

一回言っただけで切れたのか、夏木くんはもうアタフタしていなくなった。いつもの夏木くんに戻っている。私の好きな微笑で、胸を触らせて欲しいとお願いしてくる。そんな爽やかな顔しても、ダメなものはダメだ。まだ返事してないのに、手が私の胸をめがけて伸びてきて、触る気満々で感じが更に嫌だ。きっぱり断るべきだ。

それなのに私ときたら・・・。

「ちょっとだけなら、いいよ」

アホか私！

そう。惚れた弱みだろうか、私は夏木くんのお断りを断れた

試しがないのだ。こんな無茶なお願いは初めてだけど……。きつと夏木スマイルには、人の判断力を鈍らせる特殊な力があるに違いない。

夏木くんの大きな手が、私の小さな胸をシャツ越しにそっと包んだ。くすぐつたいような変な感じ。夏木くんの方が体温が高いみたいで、触れられた部分にじんわりと心地よい温もりが伝わった。恥ずかしくって、ドキドキして変になりそうだ。

最初は両手で揉まれてたけど、いつの間にか、左手が私の背中に回ってて、ゆっくり体を後ろに倒された。仰向けに寝転ぶ私に覆いかぶさる夏木くん。再び両手で胸を触ってくる。

「小さいのにちゃんと柔らかいんだね。感動！」

夏木くんは子どもみたいに目を輝かせて、私の胸を優しく揉んだ。夏木くんのイメージが、ガラガラと音を立てて崩れていく。私は見ていられなくなって目をつぶった。

ちよつとだけって、どれくらいなんだろ？

もう充分触られた気がするんだけど。

夏木くんが私の胸を擦ったり揉んだりする度に、変な感じがして困る。特に乳首に触れられた時。何かヤだ。

「あつ」

乳首をギュツとつねられて、思わず声が漏れた。変な声。恥ずかしい。

「カワイイ。ねえ、もつと声聞かせて？」

耳元で理解不能なことを囁かれた。夏木くんの吐息が耳にかかって、かなりくすぐつたい。

乳首を連続でつねったり擦ったりされたが、声を必死で我慢した。あんな変な声がかワイイわけない。

「ね、夏木くん・・・もういいでしょ？」

声が変に掠れていた。息遣いも荒いし、私どうしたのかな。

「えっ、もう？じゃあ、これで最後にするよ」

最後だという言葉にホツとして、目を開けた。そして激しく後悔した。ちょうど夏木くんが私の胸に頬擦りをしているところで・・・おまけに匂いも嗅いだりしていて・・・。

これはひくよ。思いつきりひいちゃうよ。

私の視線を感じたのが、夏木くんは頬擦りの体勢のまま、私の目を上目遣いに見て、ちよつと照れた笑みを浮かべた。私は胸がきゅんとなった。

こ、こんなんでトキメクなんて、なんて私はしょぼいんだ！

しかし、今回の夏木くんの笑みは、いつもと違うんだよ。頬が薄っすら上気してて、雰囲気の色っぽい。こんな夏木くん初めて見た。ちよつと得した気分？

夏木くんがやつと私の胸から離れてくれた。でもすごく名残惜しそうな顔。私の胸をずっと凝視している。思わず「もうちよつと触ってもいいよ」とか言ってしまったそうだ。でもダメ。絶対ダメ。夏木くんの「ちよつと」はすごく長いことが分かったから。

それにやっぱり、こういうことは恋人同士でするべきだ。夏木くんの気持ちがないことは、充分すぎるくらい分かっている。胸を触ったのだから、こんな小さい胸なんて珍しいから、好奇心で触ってみたくなっただけだと思っし。

「洗濯、乾燥まで終わったみたいだし、私、もう帰るね」

夏木くんがいつまで経っても、私の胸に熱い視線を向けてくるので、私は帰ることにした。話しかけても、上の空みたいな返事しかしてくれないし。

夏木くん壊れちゃったみたい・・・。

この日、私は予定通り、辞書のように厚みのある本を借りて帰った。

あ、田中くんの写真を見せてもらってな。と、

2・夏木くん壊れる(後書き)

夏木くん視点の話もそのうち書きたいです。

3・夏木くん元通り？

「おはよー」

教室で、いつも通り友人の奈津に話しかけると、私の変化にすぐ気付いてくれた。

「どーしたのっ？それ」

「ん。今日からスポーツブラにした」

もちろん、仲の良い奈津や数人の女子には、体育の着替えの時からでCカップが偽りだっことは、元々バレている。だけど、いきなり私がペツタンコで学校にいくと、流石に驚くようだ。スポーツブラだから、普通のブラジャーよりも更に平らになるし。

でも、もう私は偽るのをやめたんだ。好きな人には貧乳だっばらしちゃったし、もう何事もなかったかのように、Cカップを着けるのには抵抗がある。どうせ失恋したけどね……。

「そっかー。悲しむ男子もいるだろうけど、喜ぶ男子もいるだろうから、ま、プラスマイナスゼロかなあ？……否、比率としては一般的に後者の方が少ないか？……でも夕菜レベルの貧乳ちゃんは、貴重だよな。何せAカップ未満なんだから。それは店に置いてないサイズ、イコール、需要がないってことから貧乳は数が少ないことが推測される。この学校にも夕菜の他に、ほんの数人しかその域に達した貧乳ちゃんはいないし、しかも夕菜のように顔も性格もいい子ってなると、ますます限られる。つまり……」

奈津は何やらブツブツ考え事を始めた。おーい、奈津？また、あれですか？

奈津の考えることは測り知れない。しかも考え出すと止まらなくなるので、タチが悪い。こういうことはよくあるので、けっこう放つたらかした。今回は長そうなので、携帯のメールチェックなどをして時間を潰す。

「うん。モテ度アップだよ、夕菜」

考えがまとまった奈津は、親指を立てて、自信満々に頷く。

「そりゃ、どーも？」

とりあえず、褒められたようなのでお礼を言った。どうしてそういう結論に達したのか、よく分からないけど。

「あれ？夏木氏だ」

奈津に言われて目をやると、教室の入口に夏木くんが俯いて、ばつが悪そうに立っていた。奈津の席は入口近くなので、夏木くんは私たちのすぐ側に居る。

いつから居たのだろうか？ たった今通り掛かったという感じではなさそうだ。

誰かに用事？

「え・・・つと、桜井さん、ちよつといいかな？」

ためらいがちに夏木くんが顔を上げた。

朝から夏木くんの顔を見れるなんて、ラッキー！ しかも私に用事なの！？・・・つて、喜んでる場合じゃなくて、

「もうすぐチャイム鳴るよ？夏木くん、早く自分の教室に行かないと遅刻だよ」

「あ・・・ああ、ホントだ。ごめん。じゃあ、放課後いいかな？」

「うん、いいけど・・・」

「じゃ、放課後にね」

夏木くんは足早に去っていった。

どうしたんだろう。何だか歯切れの悪い夏木くんだった。

「あれは、見つかったから仕方なく話し掛けたって感じだね。夕菜、夏木氏となんかあった？」

「へっ？」

なんかあったって・・・。ええ、ありましたよ。昨日、本屋で偶然会って、家に行って、胸を触られて・・・つて、絶対言えない。

家に帰ってから、けっこう後悔したんだよね。夏木くんの方から言い出したにしろ、簡単に胸を触らせるなんて、軽い子だと思われたかも。あんな夏木くん見ちゃっても、失恋しても、私やっぱり夏木くんのが好きなんだ。だから、夏木くんの評判を落とすようなこと、言いたくない。もし言っただとしても、絶対信じてもらえない自信があるけど。だって、あの夏木くんだよ？あの夏木くんが、あんな・・・あんな、変態行為するわけないよ。・・・くはっ、幸せそうに胸に頬擦りしてる夏木くん思い出しちゃったよ。うう、忘れたい。

奈津に何て言おう？昨日のこと思い出すと、考えがまとまらない。ええっと・・・。

「言いたくないんなら、無理には聞かないけどさ。夏木氏、夕菜に気付かれるまで、夕菜の胸、ガン見してたよ」

「ええええっつっ！」

キーンコーンカーンコーン

私の叫びはチャイムにかき消され、この話題もこれで打ち切りとなった。

「ごめんね。掃除当番で遅くなっちゃって」

こうして夏木くんと放課後の約束をするなんて初めてだ。いつも本の貸し借りは、休み時間に簡単に済ませてしまっし。やはり、昨日のことが関係しているんだろうか。

昨日の夏木くんは途中から別人のようだった。アレかな。急にムラムラしちゃったってやつ？いつも穏やかな夏木くんがあんなふうになるなんて、未だに信じがたい。ムラムラ悔ることなかれ。にしても、こんな魅力ゼロの胸を触りたがるなんて・・・。

「や、たいして待つてないし。俺こそ、急に無理言つてごめんね？」
夏木くんはやっぱりと微笑んだ。

出た！夏木スマイルだ！いつもの夏木くんに戻ったんだ。

「ううん、全然！放課後なんていつも暇だし。みんな部活やってるから、帰宅部の私なんて、もう暇で暇で」

「そう。なら良かった。じゃあ、一緒に帰つてもいいかな？」

「喜んで！」

私は即答だった。

夏木くんと一緒に帰れるなんて、夢みたい。

しかし、そんな夢心地な時間も長くは続かなかつた。

4・夕菜の混乱

……あのー、夏木くん？

私たちは最初、楽しく世間話をしながら下校していた。何事もなかったかのように。それはむしろ、私には都合が良かった。だって、夏木くとギクシヤクするのは嫌だし。

ところが、だ。

私は気付いてしまった。会話の合間合間に、夏木くんが私の胸を何度もチラ見しているのを！

カバンで胸を隠すと、夏木くんは明らかにうろたえていた。

「ごめん！」

「何が？」

慌てて頭を下げる夏木くんに対して、自分でも驚くぐらい冷淡な声が出た。

「今のもだけど、昨日のことも……。俺……。その……」

言い淀む夏木くんを見て、急激に自分の気持ちが冷めていくのを感じた。

謝るということは、夏木くんは後悔しているということだ。きっと、なかったことにしたいんだ。私の胸を触ったことなんか、汚点でしかない。そうなんだよね？

胸を見てたのだって、『俺、こんな触るなんて、ありえねー』とか思ってたのかもしれない。

ひどい。ひどすぎる。私は初めてだったのに。ファーストキスもまだなのに。

失恋したことや胸を触られたこととか、全然消化できずにぐちゃぐちゃのままだった自分の気持ちが、さらに複雑にこんがらがっていく。

感情の向くまま、夏木くんを責め立てたい衝動にも駆られたが、すんでのところまで思い留まった。そんなことをしたら、友達のパジションが危うくなる気がした。

でも、そうまでして友達でいる必要があるのだろうか？報われない想いを秘めたまま、彼の側に居ても、辛いだけではないだろうか？

ああ、頭がパンクしそう。

「わかってるよ。小さい胸が珍しかったただけだってことは。昨日のは合意の上だし、さっきのチラ見だって別に気にしてないよ。謝って欲しくなんかない。私、もう忘れるから、夏木くんも忘れて？・・ごめん、急に用事思い出したから！」

私は一気に喋り切ると、夏木くんをその場に残し、走り去った。自分の気持ちが悪くまで、しばらく夏木くと顔を合わせるのはやめようと決めた。

でももう、以前のような穏やかな関係に戻るには、無理かもしれない。

そう思うと、いつのまにか視界が涙で滲んでいた。

夏木くんは何を考えているんだろう？

聞かない私も悪いんだけど、知るのがどうしても怖くて・・・。

「桜井さん、お願いだ！話を聞いて欲しい」

「ごめん、今すごく忙しいから！」

引きとめようとする夏木くんから、脱兎のごとく駆け出す私。

一緒に下校したあの日以降、私の気持ちとは裏腹に、夏木くんは私に付きまってくる。ちなみに今日で四日目だ。

いい加減分かって。私はあなたに会いたくないの！
気持ちを整理する時間が欲しいんだってば！

悲しみに暮れようが、向かっ腹立てようが、お昼になればお腹が空く。私はそういう神経の持ち主だ。

「ねえ、桜井って子いるー？」

昼休み、奈津とお弁当を食べているところに、見知らぬ女の子がキョロキョロしながらやってきた。ナチュラルな茶色のサラサラの長い髪で、色白で、お目目パッチリのやたら愛くるしい美少女なんだけど、幼いので高校生には見えない。中等部の子だろうか。もし制服を着ていなければ、小学生でも通用するかもしれない。

「私が桜井だけど？」

面識のない相手に、私は首をかしげる。お姉さんに何の用かな？

「あんたがっ！？」

美少女は私を指して、キツと睨んできた。

・・・初対面だというのに、なかなか失礼な子だね。

「あんたねー、一体どうやって、私の俊也としゃをたらし込んだわけ！？

やっぱ色仕掛け・・・ではなさそうね」

美少女は私の胸を見て、鼻でフツと笑った。

うつつ、中学生に笑われた。あんただって、私と大差ない胸してるくせに。これから成長するのかもしれないけど・・・。

「まあ、いいわ。どんないい女かと思って来てみれば・・・あんた相手だったら、勝てそう。食事中、悪かったわね。これで失礼するわ！」

颯爽と去って行く美少女の後姿を眺めながら、何となく『ホーツ

ホッホッホッ！」と高笑いが似合いそうだな、と思った。

「で、誰だったのかな？あの子」

私がボソツと呟くと、肉団子をほおばる奈津が「ぶふっ」とむせた。

「ゴホツゴホツ……。知らないで喋ってたの？夕菜らしいっちゃ、夕菜らしいけど」

「えっ？何、奈津はあの子知ってるの？奈津の知り合い？」

「いや、全然知らん。知り合いたくもない。有名だから知ってるだけ。あの子はね、花園香苗って名前で、夏木氏の彼女だよ」

『夏木氏の彼女だよ』

……。頭が真っ白になった。

4・夕菜の混乱（後書き）

エロスが不足してきましたので、そろそろ夏木視点の話を挟む予定です。

5 ・夏木の想い<夏木視点>(前書き)

「1・いきなり失恋」の夏木視点のお話です。

5・夏木の想いく夏木視点>

「お、お邪魔しまーす」

おずおずと俺の家に足を踏み込む桜井さんの声は、緊張のせいか強張っていた。そんな彼女を見ると、強引に家に誘ってしまったことを少しだけ後悔する。

やっぱり俺のこと、意識してるんだろうな……。胸に愛しさが込み上げてきた。

実は本人に訊くまでもなく、桜井さんに彼氏がいないことは知っていて、おまけに俺のことが好きだということも、気付いている。

しかし俺は数日前から、桜井さんの気持ちが田中に向くように説き伏せる機会を窺っていた。

今日は日曜日、まだ昼過ぎだ。時間はたっぷりある。偶然会えたのは、絶好のチャンスだった。

「兄貴が部屋で寝てるだけで、親はいないからそんな緊張しなくていいよ」

桜井さんをリラックスさせる為に言った。実のところ、兄貴がまだ寝ているのかは確証がない。少なくとも俺が出掛ける時は昼寝してたはずだが、バイトの日だったような気もする。

家に俺と彼女の二人きりかもしれないなんて言うと、無意味にプレッシャーを与えかねないので、この際、兄貴が家にいることにする。

彼女はあまり男に免疫がなさそうだから。……。そこがまた、いいんだけど。

桜井さんを俺の部屋に案内してから、一人で飲み物を取りにキッチンへ向かう。

冷蔵庫に果汁100%オレンジジュースがあった。お、これでいいか。

ジュースをグラスに注ぐ。

「おい」

「うおっ」

何もやましい事はないのだが、不意に声を掛けられて手元が狂う。こぼしかけた。危ない危ない。

「兄貴いたのか」

いてもいなくても、どっちでもよかったのだが。

Tシャツにブリーフ姿という、絶対に桜井さんの前に出せないような格好の兄貴が立っていた。ちなみに俺はトランクス派。

「お前、誰もいない家に女連れ込んで、何しようとしてんだよ？やらしー奴だな」

兄貴は顔をニヤつかせて言った。

「兄貴がいるじゃないか」

兄貴がいるから、誰もいない家ではない。

「とぼけんなよ。俺、当分の間、日曜はバイトだっつってただろ？今日は急に休みになったけど」

「へえ？そうなんだ」

俺はどうでも良さそうに答えた。

「何だよ。平然とした顔しやがって。ちったあ焦れよ。つまんねーな」

「俺はヤル事ばかり考えてる兄貴とは違うから。それに彼女はただの友達。残念でした」

兄貴のバカ話に付き合っている暇はない。部屋には桜井さんが待っている。

俺は悔しそうに舌打ちする兄貴を置いて、キッチンを出た。

『彼女はただの友達』

兄貴に言ったことを頭の中で、もう一度繰り返し、胸に刻み込んだ。

部屋に戻ると、桜井さんがキョロキョロと俺の部屋を物珍しそうに見回しているところで、その様子が何とも微笑ましい。

特に見られてヤバイものはなかったよな？

何気なく自分の部屋を再確認し、そんなへまはしてないことに安堵する。

「はい、オレンジジュースしかなかったけど」

「あ、ありがとう。うわっ」

桜井さんにちゃんと手渡したはずのグラスが、何故か彼女の手から滑り落ちていった。胸の辺りに、こぼれたジュースが染み込んでいく。

「大変だ。早く洗わないと！」

俺は急いで着替えのシャツを用意して、桜井さんを脱衣所に連れて行き、洗濯機を使うよう勧めてから自分の部屋に戻った。

・・・彼女、結構そそっかしいんだな。

グラスを渡した時の状況を思い浮かべてみる。彼女はちゃんと受け取ったはずだ。そうだ、その時、確かちよつと指が触れたっけ。

もしかして、指が触れて俺を意識したとか？いや、まさかな。今時、指が触れたぐらいで、そんな反応するわけ・・・桜井さんならあるか。最近じゃあ、珍しいぐらいピュアな子だからな。俺の笑顔にすぐポーツと見惚れるとこなんか、可愛くってしょうがない。

あんまり可愛いから、思わず抱きしめそうになったこともある。すんでのところまで思い止まって、事なきに終わったが。おまけに鈍い彼女は全く気付く様子もなく、俺の地位は守られた。しかしこのままだと、いつかは友達の域を超えてしまいかねない。焦りが生じた。そのことがあって、俺は以前から頼まれていた田中の紹介を実行することにしたのだった。

俺は嫌な奴だ。彼女が俺を好きだと気付いていて、他の男とくっつけようとするなんてな。

しかも、実は俺も桜井さんが好きなくせに。

俺は大馬鹿者だ。自分でもよく分かっている。俺の行動が彼女をどんなに傷付けることかは。そしてきつと俺自身も傷付くことだろう。

俺の過去の苦い経験が、恋愛することを臆病にさせる。

俺たちが付き合っても、きつとうまくいかない。

しかし俺は手放したくないんだ。君と過ごす楽しい癒しの一時を。だからせめて、ただの友達としてでもいい、君の側に居させて欲しい。

5・夏木の想い<夏木視点>(後書き)

今回は壊れる前の夏木でした。次回、いよいよです！

6 プチ崩壊＜夏木視点＞（前書き）

「2 夏木くん壊れる」の夏木視点です。

6・プチ崩壊<夏木視点>

「ごめんね、迷惑かけて」

俺の部屋に戻ってきた桜井さんは、少し顔が赤かった。ジュースをこぼしたことを気にしているんだと思う。

さっきは崩し気味の正座だったのに、今、腰を下ろした彼女は膝を胸に抱えて座っていた。

あのね・・・パンツ見えてるよ。

桜井さんは膝上丈のふんわりしたスカートを履いていた。

迂闊うかつな子だなー。そのスカートうかつの長さで、そんな座り方をしたら見えてしまっつて、想像つかないのか？

俺も一応男だし、パンツが見えると得した気分なのだが、もしかして、この子は他所でも無意識にこんなことをしてるんじゃないかと気が気でならない。

言うか、言うまいか悩みながらも会話を続けた。

「熱い飲み物じゃなくてよかったよ。火傷なんかしたら大変だし」
不幸中の幸いだった。熱い飲み物だったら、と考えただけでもゾツとする。

彼女の身を気遣いつつ、迷惑に思っていないという意味を込めて、俺は笑顔を見せた。

しまった。パンツを注意するタイミングを逃したかもしれない。
今更言つと、何故すぐに言ってくれなかったのかと、逆に不信感を抱かれそうだ。

仕方がない。今回は俺の胸の内に秘めておこう・・・ピンクのチエック柄。

できるだけパンツを視界に入れないようにして、桜井さんの会話を弾ませることに集中した。主に最近読んだ本の感想なんかで盛り上がった。

だいぶ彼女の緊張がほぐれた頃、そろそろ田中の話でも切り出そうかと思計らっていた矢先だった。

ずっと膝を抱えたままだった彼女が足を伸ばし、パンツが見えなくなった。

やっとパンツから開放された。たかがパンツ。されどパンツ。彼女の手前、必死に平常心を装うが、かなりの破壊力だった。

不必要に精神をすり減らしてしまった。

事なきを得て、安堵の溜息をつきかけたが、それすらも飲み込む。何も知らない彼女の前で、溜息なんぞつくわけにはいかない。

俺は自分の地位を守る為、細心の注意を払わなければならないのだ。

彼女の中の俺という存在は、光栄なことに王子様の存在なのだ。

王子様はパンツを盗み見てはならない。ましてや、パンツの向こう側を想像するなんて、当然のことながらご法度だ。切腹ものだ。

気を取り直して彼女を見ると、何となく違和感を覚えた。

髪分け目がいつもと逆？

いや、そういうことじゃなく・・・、ああ、俺のシャツを着てるからしっくりこないのかもしれない。やっぱり俺の服じゃあ、ブルカだよな。可愛い。華奢な彼女の体が、より一層小さく感じる。

細いわりに結構豊富な彼女の胸元も、ゆったりとした服ではほとんど目立たないようで、ほぼまっ平ら。ペタンコ。まな板。

んん？幾らなんでも、無さ過ぎないか？俺の服云々どころじゃなく、これってもしや・・・もしや・・・嘘だろ？

俺の精神は崩壊した。

日頃、温厚な奴ほど、一度キレると手が付けられないとか言うが、どうやら俺もそっち側の人間だったらしい。

ここから先の俺は、俺であって俺ではない。

俺の目の前に、ひっそりと佇むたたず小さな二つの膨らみ。

初めまして。俺、夏木俊也って言います。やあ、やっと会えたね。俺はずっと、本当にずっと君を探していたんだよ。こんな近くに居たのに、黙ってるなんて酷いよ。でもね、いいよ、許してあげる。こうして俺の目の前に、現れてくれたんだから。

挨拶を交わす俺たちの仲を裂くように、邪魔者の膝小僧がスツと割り込んできた。

こらくソガキ！何さらすんじゃない！

俺は頭にカツと血が上る。

が、同時に困ったように眉を寄せる、桜井さんの顔が目に残まった。

瞬時に本来の俺が顔を出す。

俺、一体何してんだ？

「あ、あ、あのっ。何ていうか・・・」

何か言え。うまいこと言え。誤魔化せ、俺！

今ならまだどうとでもなる。

「私は気にしてないよ。さっきの本の話の続き、しよ？」

ほら、俺が口ごもるから、彼女に気を使わせた。

「あつ、いや、違うんだ。その・・・」

変わらないだろ？ここは「そうだね、ごめん」とか言って、いつもの笑顔だろ？

中途半端に喋るから、彼女が俺の話の続きを待っている。

おかしい。自分の体なのに、全く思い通りに動かない。

しかも俺の口は俺の意思に反して、有り得ないことを口走ろうとしている。

待て。言つな。言つてはならない。それを言っちゃあ終わりだ。

身の破滅だ。やめろ、やめてくれ。

俺は気を静めるために、スーツと息を吸い込んだ。そして、

「・・・胸、触らせて」

ついに言ってしまった。

6 ・プチ崩壊く夏木視点く（後書き）

読んで下さってる皆様、ありがとうございます！

「2 ・夏木くん壊れる」の夏木視点、今回は前半部分でした。

じらすつもりはないんですが、それなりの量になったので、続きは
次回の更新になります。

7 完全崩壊＜夏木視点＞（前書き）

「2 夏木くん壊れる」後半部分の夏木視点です。

7・完全崩壊<夏木視点>

桜井さんがパツチリとした大きな目を、更に大きく見開いて驚いている。

そりゃ驚くよな。

一方、自滅した俺は、意外にも晴れ晴れとした気持ちだった。

気分爽快、何かがつっ切れた。自由だ。俺は自由人だ。もはや1ミリも迷いはなかった。

体が自然に動いて、彼女の胸を隠している膝をそつと伸ばす。再会を果たす、俺と小さな膨らみ。やあ、また会えたね。見詰めるだけでは物足りず、触れたいくなる。

「ちょっとだけでいいから。服の上からでもいいから、ダメかな？」
二度目のお願いは、実に堂々たる物言いだった。

長年の夢が今、ここにある。実現まであともう少し！
触りたい。すっげー触りたい。

俺はニツコリ微笑んで、彼女の返事を待つ。彼女は心根の優しい子だから、ちゃんと頼めば分ってくれるはずだ。

「………ちょっとだけなら、いいよ」

恥じらいを見せて俯く彼女。

許可は下りた。

よっしやー！！！！

俺は心の中でガッツポーズした。

早速、両手で彼女の胸を、服の上から優しく包み込む。

小さくても、男とは違う女性特有の胸の柔らかさがあった。

彼女の胸をすべて覆いつくす俺の手。俺の手は特別に大きいわけではなく、至って普通サイズだが、自分の手がやたら大きく感じた。控え目でちっちゃなおっぱい。奥床しい。なんて奥床しいんだ。感触を確かめるように、何度も丁寧に揉みしだいた。

あることを思いついた俺は、実行するべく彼女を仰向けに寝かせた。すると予想通り、胸のお肉が重力に負けて広がり、更に膨らみが見えなくなる。

ドキドキしながら彼女の胸に触れた。

「小さいのにちゃんと柔らかいんだね。感動！」

感動のあまり、俺は思わず声を上げる。

こんなに凹凸おうちょうが無くなっても、ちゃんと柔らかさはあって、膨らみの頂点はコリコリになっちゃってて……。

ああ、なんて健気なおっぱいなんだ。

愛しさが込み上げてきて、俺は思うがままに触りまくった。

撫でたり、揉んだり。指先で突いたり、なぞったり。

乳輪の大きさはどれくらいだろうか。

俺の理想の乳輪のラインを想像し、それを辿ってみる。

うん。これぐらいが好みだな。別にこれ以上でもこれ以下でも、嫌いってわけじゃないんだけど。

理想のラインをクルクルなぞっていると、彼女の体がピクッと震えた。

俺はイタズラ心が芽生え、乳首をギョツと摘つまんでみる。

「あっ」

彼女は少し反そり返って、甘い声を漏らした。

「カワイイ」

恥ずかしがって赤面する彼女の耳元に口を寄せ、

「ねえ、もつと声聞かせて？」
わざと吐息混じりに囁いてみた。
くすぐったそうに体をよじる彼女。
たまんねー！

彼女の反応が嬉しくて、俺は執拗に乳首に刺激を与えた。しかし彼女は時折、体をピクピクと震えさせるだけで、声を我慢しているようだった。

その仕草に俺はより一層煽られて、乳首を捏ね続けるが、彼女は目を閉じたまま、口をギュツと固く結び、頑なに耐えていた。

「ね、夏木くん・・・もういいでしょ？」
息も絶え絶えな掠れた彼女の声は、とても艶しくて、俺の官能がくすぐられた。助長される性的欲求。

このままセックスしたい。

しかし、彼女は終わりを望んでいる。

「えっ、もう？」
俺は咄嗟に非難はしたものの、
「じゃあ、これで最後にするよ」
泣く泣く告げた。

最後ということもあって、俺は思いつ切り弾けた。
頬でおっぱいにすりすりし、匂いも嗅いだ。洗濯したての俺の服の匂いと、オレンジジュースの香りがした。彼女の体臭を期待した俺にはちよつとガツカリだったが、その分、存分に頬擦りした。

生きててよかった。こんな感動に出会えるなんて。

感じている彼女の表情を、目に焼き付けておこうと、視線を向けると、彼女と目が合った。

あれ？俺のこと見てたの？

照れ隠しにニコツと笑うと、思ったとおり彼女はポーツとした顔になって、俺に見惚れていた。

可愛い。めちゃくちゃ可愛い。

いつ、どうやって離れたのかイマイチ記憶がない。
気付いたら、俺の大好きなちっちなおっぱいが、少し離れたところにいる。

触りたいなー。

触りたいなー。

触りたいなー。

コンコンコン。

「おい。辞書貸してくれ」

俺の返事も聞かずに、兄貴が勝手に部屋に入ってきた。

ハッ和我に返る俺。

何してたんだっけ？

あ、桜井さん。彼女はどこだ？

部屋を見回すが、彼女の姿はどこにもない。

楽しく本の話で盛り上がったのは、よく覚えている。

その後どうした？

ふと、小さな二つの膨らみが脳裏をよぎる。

俺、彼女に何をした？

サーツと体中の血の気が引いていくのを感じた。

8・嫉妬（前書き）

「4・夕菜の混乱」の続きです。夕菜視点に戻ります。

<あらすじ>夏木から距離を置こうとする夕菜。そんな中、夏木の彼女である中学生の美少女、花園香苗の存在を知る。

8・嫉妬

夏木くんの彼女？あの子が！？

ウソ！夏木くん、彼女いたんだ・・・。

彼女いるくせに私の胸を触るなんて、どういふことよ！？

・・・ていうか、夏木くんロリコンなの？

「・・・奈津、私って幼く見える？」

「えー？童顔ではあるけれど、18歳と言われれば、ちゃんとそう見えるし、歳相応なんじゃない？さすがにどう頑張っても、中学生には見えないね」

「そ、そう」

軽く凹んだ。

「何でまたそんなこと、急に聞くわけ？あつ、もしかして、花園香苗に張り合う気だったとか？」

奈津は意味あり気な目で、私を見てくる。

「ち、違つよ！何言ってるの。逆だよ、逆。私が夏木くんのタイプじゃなくてよかったって、安心してたの！」

「ふーん」

あ、奈津、その目は信じてないな！

「決めた！私、夏木くんと絶交する」

「はあ？」

いきなり絶交宣言をした私を、奈津が怪訝そうな顔で見ている。

奈津にはまだ、夏木くんとの間に起こった事を話せないままでいる。

「ごめん、奈津。」

休憩時間、爆睡中の奈津を放置して、私は独り教室の窓からグラウンドを眺めていた。

昨日、勢いで奈津に「夏木さんと絶交する」とは言ったものの、人の気持ちはそう簡単に割り切れるものではないようで、グラウンドにいる夏木くんの姿を発見した私は、ささやかな喜びを感じていた。

・・・夏木くん、ジャージ姿もカッコイイなあ。

最近、その夏木くんから逃げ回ってばかりのくせにね。

久しぶりにほんわかした気分で、体育の準備中の彼を眺めていると、その彼を目がけて走り寄る女の子の存在に気付いた。

うわっ、花園香苗だ。

よく見ると、花園香苗は高校指定ジャージを着ている。うちの中等は、制服は高校とほぼ同じだが、ジャージは違う。

ということは・・・・・・高校生だったの!?

ありえない。あれで高校生だなんて。しかもジャージの色は黒。学年ごとに色分けしてあって、黒は私と同じ3年生を意味する。

嘘でしょ？

しかし、驚かされるのはそれだけではなかった。

花園香苗が、彼の背中に勢いよく飛びつき、驚いた彼はすぐに花園香苗を背中から引き離すが、花園香苗のサラサラな髪をクシャクシャに掻き回して、笑っている。花園香苗も微笑み返して、再び彼に抱きついた。

ハッキリ言う。

あれはイチャついてるカップル以外の何者でもない。

私は、沸々と湧いてくるどす黒い感情を、とめることができなかつた。

「桜井さん、今度こそ俺の話聞いて欲しい！」
廊下を歩いていると、切羽詰った様子の夏木くんに、腕をガシツと掴まれた。

こうしていきなり腕を掴まれたのは初めてだった。
私が逃げないように、仕方なくしているんだろうけど、ここまでする彼に驚きの色を隠せない。

「・・・わかった」
大人しく従う私を見て、彼はホツと胸をなでおろし、私から手を離した。

「ここじゃ何だから、中庭に移動してもいいかな？」
私が彼の隣を歩こうとしないので、彼が少し前を歩き、時々振り返って私の存在を確認する。
そんな感じで、中庭に着くまで、私たちは無言だった。

「わっ！ささささ桜井さん？」
人気のない中庭に着いてすぐ、私は彼の背中に襲い掛かった。しかし、ちょうど彼が振り向くのと同時だったので、結果的には正面から抱きつく形になっている。

彼の胸に顔をうずめ、背中に手を回してギュツと力を込める。
夏木くんの匂い・・・。いい匂い。頭がクラクラする。
胸いっぱい吸い込んだ。

さあ、夏木くん、どうする？

私は抱きついたまま、彼の行動を待った。

………待った。

………ひたすら待った。

彼は棒立ちのまま、ぴくりとも動こうとしない。

私は諦めて、彼から離れた。

「ごめん。急に気分が悪くなつて、ふらついちゃった。今から保健室行ってくる」

「あ、そ、そうだったんだ。大丈夫？心配だから、俺もついてくよ」「ううん。一人で平気。それに、授業もうすぐ始まるよ」

もし保健室に行くまでに何かあったら心配だからって、彼は結局保健室の前までついてきた。

……優しいんだね、夏木くん。でもね、その優しさが女の子に勘違いさせちゃうってこと、分かっている？

誰にでも優しい夏木くん。

実はね、分け隔てなく優しいように見えても、私に対しては他の人と少し違うって感じてた。恋愛感情がないって分かってても、どこか特別なのもあって。でも単なる思い上がりだったんだ。

夏木くんの特別は花園香苗だった。

私が花園香苗と同じように抱きついてても、ノーリアクションの夏木くん。

彼女と友達の差を感じた。

8・嫉妬（後書き）

読んで下さってる方々、ありがとうございます！

ラブコメと語っておきながら、意外にシリアスな気がしてきました。タイトルが思いつ切りバカなので、それを期待されてクリックした方には申し訳ないです。

しかし、一応、作者が目指すところはラブコメ！です。

9・夕菜、フェティシズムを教わる

「ねえ、奈津。私、誰かに見られてる気がするんだ・・・」
最初は気のせいと思っただ。自意識過剰だっただ。でも気のせいでは済まされない、嫌な視線を感じる。

「あ、夕菜でも気付くんだった？」

奈津が感心したように言った。む、聞き捨てならない。

「私でもってどういう意味よ？」

「気にしない気にしない。褒め言葉だから」

いやいや、そんなの褒め言葉なわけないでしょう。

私が抗議をしようと口を開きかけると、奈津が遮るように話し出す。

「本題に戻すけど、その視線は気持ち悪いだろうけど、何もして来ないから大丈夫。ただ、見るだけだよ」

「え？見てるだけって、何で？」

「好きだからに決まってるでしょ」

奈津の言ってることが理解できずに、私は首を傾げる。言ったよね？嫌な視線だっただ。もし仮に私の事が好きだとしても、好きな人にあんな視線を向けるものなの？ねちっこくて、いやらしい視線を・・・。

「あ、言葉が足りなかったみたいね。好きなのは」

奈津がニツと笑って、私の胸を指し示した。

「夕菜の胸」

「はあ？」

ますます意味が分からなくて、私の頭はクエスチョンマークでいっぱいになった。私の胸は、何の魅力もない貧乳だよ！？

理解できない私に、仕方なさそうに奈津が詳しく教えてくれた。

貧乳フェチ、世の中にはそんな性的嗜好の人がいるんだそう。私は今まで考えもしなかった。

奈津によると、私の胸を見てる人の調べはついてて、害はないとのこと。見るだけで幸せなタイプなんだとか。・・・せっかく説明してくれたけど、やっぱり私には全く理解できない。でも教えてくれてありがとう、奈津。

放課後、夏木くんが私の教室の前で待っていた。

「桜井さん、具合どう？」

昨日は結局、保健室に行ってから彼は彼に会わず仕舞いだった。いい加減、話とやらも聞かなきゃね。

いつまでも彼を束縛しちやいけな。彼女がいる人なんだから。私の気持ちはやっと落ち着いたっていうか、諦めたっていうか・・・、ともかく今日こそは、話を聞けそうな気がした。

私たちは久しぶりに一緒に帰った。

「あの公園で話そう」

私は彼を誘って、公園のベンチに腰を下ろした。
人気ひとけのない公園だった。少子化で、遊ぶ子ども数の数が減っているんだろう。ここならゆっくり話ができそうだ。

彼は少し緊張しているようだった。

私の顔を見たり、遠くを見たり、足元を見たり、夏木くんらしくらぬ振る舞いだ。

そんな中、私は彼が一瞬、私の胸を見たのを見逃さなかった。

今日、奈津と話した貧乳フェチのことを思い出す。

もしかして、夏木くんは……。

でも、彼がそんなはず……。

だけど、彼の態度がおかしくなったのは、私がCカップをやめてすぐだった……。

私は彼の手を取って、自分の胸に当ててみた。

彼は最初、呆然としていたけど、そのうち自ら手を動かして、私の胸をやわやわと揉んだ。

揉まれてるうちに、妙な気分になる私。

「……んっ」

やっぱり、乳首の辺りを擦られると変になる。

「……やっ」

私は彼の手を払いのけようと、手に力を込めた。

「わっ！ごめん！手が勝手に！」

彼がハツとなって、後ずさった。……散々、揉んだくせに。

だけどこれで、私の中で答えが出た。

やっぱりそう！夏木くんは貧乳フェチなんだ！

……私は彼にとって、胸だけの存在。

「サイテー！もう夏木くんとは絶交する！」

きっぱり宣言した。もう迷いはない。

私は青ざめる彼を置いて公園を出た。

10・傷心の夏木<夏木視点>(前書き)

今回は夏木視点ですが、9話の続きです。

10・傷心の夏木<夏木視点>

『サイテー！もう夏木くんとは絶交する！』
頭の中に、彼女の声が何度もこだまする。
絶交する、ってさ。軽蔑されたんだ。もうお仕舞いだ。

俺は力なく立ち、足をよろめかせながら帰路につく。

結局、俺の気持ち、聞いてもらえなかった。

だが、打ち明けたところでどうにかなったのか？

どっちみち、遅かれ早かれ結果はこうなっていたに違いない。
何だかもう、どうでもいい・・・。

「俊也！」

公園を出てすぐの電信柱の陰から、花園が姿を現した。

何だよ、こんな時に。今はお前に構ってやる気分じゃねーんだよ。

「悪い。また今度な」

俺は花園の側を通過しようとしたが、花園に手首をガシッと掴まれた。

何だ？何だか嫌な予感がするぞ。

花園はものすごい馬鹿力で俺の手を、花園の胸に押し当てる。

わっ！

小さい膨らみだが、柔らかい感触が手に伝わってきた。

さつき、桜井さんの胸を揉んだ手が、今は花園の胸に触れている。

「お前っ！何するんだよ！！」

俺は咄嗟に手を引いた。

くそーっ！桜井さんの胸に触った手、しばらく洗わないで大事にしよーっと思っただのに！！！！

「何だよ？何でなのよ！？あの女の胸だったら触ったくせに！」
花園が悲痛な面持ちで、俺に詰め寄る。

・・・見られてたのか。カッコ悪。俺は内心舌打ちした。

「貧乳が好きなんでしょ？だったら、私の胸でもいいじゃない！」
花園は小さな胸を精一杯突き出して、俺に迫ってくる。

「あんな、そういう問題じゃなくって」

俺はチラッと花園の胸を見る。

桜井さんに負けず劣らず、小さな健気なおっぱいだ。

そそられない、と言ったら嘘になる。

しかしそれは街ですれ違う他人の胸が、俺好みの貧乳でちよつと
テンション上がるぐらいな感じで、我を失ってしまうほどではない。
それに花園なんかの胸を触ったりしたら、間違いなく人に言いふ
らされるだろうし、世間からロリコンのレッテルを貼られること間
違いなすだ。

いや、言いふらされるからとか、ロリコンとか関係ない（もちろ
ん俺はロリコンではないが）。

そもそも俺は桜井さんだから、触りたくなるんだ！

「そうか！そうだったんだ！」

突然声を張り上げた俺を、花園が怪訝そうな顔で見ていた。

「花園のおかげだ！」

俺は嬉しさのあまり、花園の頭を撫でまくって髪をグシャグシャ
にした。この撫で心地、親戚んちの犬にそっくりで気持ちいいんだ
よな！。

「ところで、お前。俺が貧乳好きだって、何でそう思った？」

ふと疑問を感じて、問いたです。

俺、貧乳が好きです！。大好きです！。みたいな雰囲気をかもし
出してたらどうしょ・・・。

「・・・田中に聞いた」

花園がばつが悪そうに答えた。

田中！あの野郎！余計なことを吹き込みやがって！

「花園。俺は、桜井さんが」

「わーわーわーわーわー」

俺の話を遮って、花園が耳を塞いで喚き出した。

聞きたくないんだろうな。俺もできれば傷つけたくなかったんだが。

「わーわーわーわーわー」

花園の気持ちは薄々感じてはいた。俺へのコミュニケーションが半端じゃないし。

「わーわーわーわーわー」

でも、俺はお前のことは妹みたいにしか思えない。

今日みたいにあからさまに来られると、もうハッキリ告げるしかないよな。

「わーわーわーわーわー」

・・・おい！ちよつと喚き過ぎじゃないか？

やばいな。騒ぎすぎて、ご近所の皆様が、わざわざ様子を見にやっってきたではないか。

「花園！いい加減にしろ」

花園の口を手で押さえる。

「んーんー」

ご近所の皆様が一齐に身構えるのを感じた。「ねえ、警察に通報した方がいいんじゃない」とか、そんな囁きも聞こえる。

俺、誤解されてる？

「ち、違います。単なる兄妹ゲンカですから」

俺は慌ててフォロワーに入る。花園は幼く見えるから、兄妹の設定

の方が自然だろう。

「でも顔が似てない」

オバちゃんのするどいツッコミ。

「いえ、そんな事ないです。ソックリです。例えばホラ」

俺は桜井さん用の取って置き笑顔、出血大サービスで披露して、

「二人とも美形なところが、ね？」

しれっと言つてのけた。

苦し紛れに言っただけど、オバちゃんたちは顔を赤くしてポーツとなつて納得してくれた。中には数人おっちゃんも混じつてたが、おっちゃんもポーツとなつてた。

俺つてすげー！

「花園。おい、花園？」

花園も俺に見惚れている。まったく、しょーがない。

ホッペタをペチペチ叩いて正気を取り戻させる。

「あつ、俊也・・・」

「花園。さっきの話の続きだけどな」

「好き！私、諦めないよ！俊也の彼女は私なんだから！！」

どうしてかな。人生って自分の思うようには、なかなかいかない。

10・傷心の夏木<夏木視点>(後書き)

今回書いてて思ったんですが、やっぱり夏木視点、書きやすいな！。

11・ついに田中登場<夏木視点>

家に帰ると、田中を電話で呼び付けた。

俺は携帯電話を持っていない。以前、家の電話で携帯にかけた時、通話料が高いと母親に叱られた事もあり、田中と直接会うことにした。

「よし」

何食わぬ顔で、田中が俺の部屋にやってきた。

田中は学校ではクラスが違う為、隣のクラスと合同でやる体育の授業以外あまり接触がないが、家が近所なので、こうして学校以外で話すことが多い。

ちなみに俺は6組で田中は5組。ついでに言うと花園も田中と同じ5組。桜井さんはだいぶ離れて1組。

「お前、どういいうつもりだよ？花園に妙なこと吹き込んで」

俺はお茶も出さずに、早速本題に入る。

「妙なことって、お前が貧乳好きだってことか？」

田中が全く悪びれた様子もなく答える。

「そう、それだよ。何で男同士の会話を女子に漏らすんだよ。そのせいで俺はさあ・・・」

言いかけてやめる。軽々しく話す事ではない。

俺のことが好きだと必死に叫んだ花園。俺はその気持ちを受け入れてやれない。自分の気持ちに相手に受け入れてもらえないってのは、辛いことだよ・・・。俺は桜井さんの絶交宣言を思い出し、暗い気分になった。

「何何？何か進展あったわけ？花園の貧乳について墮ちた？」

嬉しそうに田中は聞いてくる。あのね、俺は怒っているんだよ？

「墮ちるわけないだろ。何企んでるんだよ」

「ちえっ。墮ちなかったのかー。企むとか人聞きの悪いこと言うなよ。俺はただ、夏木が花園とくっついて、傷心の桜井さんを俺が優しく慰めてだな、そのうち桜井さんが俺のことを好きになるっていうシナリオを描いてるだけだよ」

何！？

「・・・田中。俺が桜井さんのこと、やっぱり紹介できないって言った時、アツサリ承諾してなかったっけ？」

俺、てつきり諦めたのかと思ってた。田中と桜井さんは全く接点がないし、田中は桜井さんの外見が何となく気に入ってた程度だろ？

「ん？俺は夏木を頼るのを諦めただけだよ。夏木を好きな桜井さんが、その夏木から俺を紹介されるってのは、なかなかの衝撃だと思わない？シヨツクのあまり、俺と付き合ってくれそうな気がしてたんだけどな。流されやすそうな子だし」

するどい。

「だけど、夏木が紹介無理だって言うんなら、自分で動くしかないだろ？」

「だからって、俺のことを陥れようとするのはどうかと思う」

「桜井さんが夏木以外に目を向けるには、夏木に彼女を作らせると効果がありそうなんだよ。だから早く花園とラブラブになっしてくれよ。世間的にはお前らはもう付き合ってるんだし」

田中が俺の肩をポンと叩く。

ちよつと待て。

「世間的には付き合ってるって、どついう意味？」

「結構前から花園が頑張ってる、夏木と付き合ってるっていう噂広めてたよ。外堀から固めるんだってさ」

「はあ！？何勝手なことしてんだよ！」

「いいじゃねーか。桜井さんを紹介できないって言い出したのも、実は貧乳だって分かったからだろ？花園も貧乳だし、そつちで手を

打てば」

「俺は胸が目当てなんじゃない！
きつぱりと言いつつ切った。」

確かに彼女の胸に気付いてから、俺は変わった。・・・俺は胸が目当てなのかって悩んで、そんな自分にうんざりだった。

だが、花園のおかげで、気付くことができた。
貧乳なら何でもいいわけじゃない。

桜井さんの胸だから、触りたいんだ。

悟りを開いた俺は、未来が明るく輝いているような気になった。
しかし水を差すように何度も蘇る彼女の声・・・。

『サイテー！もう夏木くんとは絶交する！』
うつ。・・・そうだった。全く輝いてない。・・・お先真っ暗。

「俺、桜井さんに絶交された・・・」
ぼつりと呟く。

「えっ？何で？何かやらかしたのか？」
田中が驚いて身を乗り出した。

「まあ、いろいろと・・・」
今まで仕出かした、数々の失敗を思い浮かべ、自業自得だと更に落ち込んだ。

まず、あれだ。この部屋で彼女の胸を触ってしまったこと。・・・
今でも死にたい気分になる。

そして更に次の日。もう彼女に会わず顔がないと思っていたにもかかわらず、彼女の教室の前を通り掛かった時に、彼女の胸に心を奪われてしまった。最低だ。しかも見つかって、言葉を交わしてしまっし。

だけど、驚いたことに彼女は以前と変わらず、普通に接してくれた。それなのに俺は彼女の胸をチラ見してしまっし・・・。

どうしようもないな、俺。

チラ見がばれて謝ると、彼女の態度が急変して行って、「私は気にしてない」とか「もう忘れて」とか言うくせに、泣きそうな顔で走っていった。

それから彼女は俺のことを避けるようになった。

無理もない。俺だって、彼女の立場になれば俺みたいな奴と関わりたくない。

でも俺は……昔、恋愛で辛い経験をして、もう恋愛はコリゴリなはずだったのに、彼女を欲してやまない自分を抑えられなかった。

「夏木、俺がいるの忘れてない？」

物思いにふける俺に、田中が不安そうに声を掛けてきた。

「あっ、悪い。忘れてた」

11・ついに田中登場く夏木視点く(後書き)

読んでくださって、ありがとうございます！

初めから名前だけは出ていた田中。やっとここに登場です。
夏木、夕菜がいないと普通の人ですね。

12・腐った夏木<夏木視点>

「田中はさー、桜井さんのどこに惹かれたわけ？」

俺は田中がどうしてここまで、桜井さんに執着するのかが分からなかった。もしかしたら、俺の知らない特別なエピソードがあるのかもしれない。

「んあ？どこって、顔。顔だよ」

田中は特に悩みもせず、平然と答えた。

「顔っ！？それだけなのか!？」

驚きのあまり、俺は思わず声を荒げて、他に惹かれたところを聞き出そうとする。

確かに彼女の顔は可愛い。だが、それだけなわけないだろう？

「だって、しゃべったことねーし、顔以外知らないだろ。あ、胸は小さくても大きくてもどっちでもいいし、お前と違って」

「お前、顔だけって・・・桜井さんに失礼じゃないか？」

「夏木みたいに胸だけよか、いいんじゃない？」

「だから俺は違っつて！もともと桜井さんが好きだったし」

「はいはい。俺を紹介してくれようとしてた奴が、今更、何言ってるだろうねー」

田中はあくまでも、俺が胸目当てだと信じて疑わないようだ。

でもまあ、そう思われても仕方ないか・・・。

もし、俺が彼女に告白できていたとしても、彼女も田中を紹介しようとした俺なんか、信じてくれなかったんだろうな。気持ちを打ち明けようと彼女を追いかけ回していた時、そのことがネックになってしまっつて、口ごもる事が多かった。何を言っても、胸が目当てだと思われそうで・・・。

実際俺は、彼女の貧乳を見ると自制できなくなる危ない奴だしな。
・・・はあ。

「しかし、夏木が絶交されるとはねー。何かあったか知らんけど、お前、女受けいいのに珍しいよな。あ、もしかして俺、今チャンスだよな！桜井さんに思い切って話しかけちゃおっかなー」
ニヤニヤ笑う田中のムカつく顔を、思わず拳で殴りたくなったが、想像だけでやめておいた。俺は平和主義者なのだ。
しかし、このままでは彼女が田中の毒牙にかかってしまう。どうすればいいんだ。

田中は俺の前ではこんな奴だが、女性相手だと、意外にも誠実だ。結構彼女を大事にするタイプだ。だからこそ、紹介してもいいと思っただけだ。

もしかしたら、彼女は田中を好きになってしまいかもしれない。

田中は俺に言ったとおり、桜井さんに接触し始めた。
人見知りの彼女にどうやって取り入れたのか、俺は不思議でならなかったが、二人が一緒にいるのを度々見かけるようになった。

一方、俺は絶交された為、もはや近付く勇氣もなく遠巻きに見ているだけだった。

「俊也あー」

花園が相変わらずベタベタしてくる日々。

「だから花園、こういうのはやめてくれて言ってるだろ？」

くつつく花園を引き離して、やんわりとたしなめた。

「俺は、桜井さんのことが、す」

「もう望みないみたいだけどね！」

花園が指し示した方を見ると、田中に肩を抱かれて廊下を歩く桜井さんの姿があった。

・・・すごく親密そうに見えた。

二週間が経った。

駄目だ。彼女のことを忘れられない。諦められない。でも近付くことは許されない。・・・どうにもできない。

俺は気持ちの行き場をなくし、気が腐っていった。

花園を追い払う気力もなくなって、放置。

傍からみたら、俺たちはバカップルに見えるだろうか。

「夏木氏、夏木氏！」

放課後、花園に腕を引つ張られて帰るところだった。

「夏木氏！おい、夏木氏ってば！！」

俺を呼ぶ声がする。

桜井さんの声ではない。その時点でもはやどうでもよかったが、あまりにもしつこいので、俺は仕方なく振り向いた。

「島崎さん？」

桜井さんの友達の島崎奈津さんがいた。意外な存在に俺は驚く。

「夏木氏、最終確認だけど、今は花園香苗と付き合ってるの？」

島崎さんが渋い顔で、俺と花園をいちべつ一瞥した。

「付き合ってるよ！」

花園が俺に腕を絡ませて、当然のごとく言う。

俺は溜息をついて、

「付き合ってるけど、それが何？」

花園の腕を振りほどきつつ、島崎さんに向き直った。

島崎さん、目的は何？もしかして、俺と桜井さんの間にあったことを知って、怒りにきたとか？

俺は桜井さんとは仲良くしていたが、島崎さんとはほとんど交流がない。島崎さんは得体が知れないというか、どこか取っ付きにくい感じがして、苦手なタイプだ。何を言われるのか、見当がつかない。恐らく、俺にとって嬉しい内容でないのは確かだろう。

島崎さんが口を開くのを、俺は静かに待った。

「・・・ラストチャンスだよ、夏木氏」

島崎さんが渋い顔のまま言った。

12・腐った夏木<夏木視点>(後書き)

読んで下さって、ありがとうございます。
そろそろ話が進む予定です。

13・告白<夏木視点>

俺は必死に走った。

目指すはあの人気ひとけのない中庭。

そこに桜井さんがいると島崎さんが教えてくれた。

どうやら俺が桜井さんとの関係を取り戻す最後のチャンスらしいのだが、島崎さんの言う事は抽象的で今一つ理解できなかった。とりあえず、行けば分かるらしい……。

なすすべもなく煮詰まっていた俺が、この話に乗らないわけがなかった。

俺は息を切らして、中庭まで一気に走りきる。

彼女はどこだ？

辺りを見回すが、彼女どころか、人っ子一人いないように見える。おかしい。もう帰ったのか？

手入れが行き届いていない為、中庭は草が生い茂っている。

俺は背の高い草を掻き分けて、彼女を探した。

まさか、こんなところにいるわけがないと思いつながら……。

「……きゃー！」

近くの茂みから、か細い女性の声が聞こえた。

今の声、桜井さんの声に似てないか？

俺は慌てて、草を掻き分けて声の方へ向かった。

驚きのあまり声が出せなかった。

横たわる彼女に田中が覆い被さっていて、彼女が手や足で田中を

押しつけようと抵抗していて……。これって……！

俺は理解するよりも先に、体が動いていた。

田中の襟首を掴んで投げ飛ばす。

「田中！お前、何してんだよ！？」

俺は怒りで体が震えた。

まさか、田中がこんな最低な奴だとは思わなかった。

殴って気が済むわけじゃないけど、殴らずにはいられない。俺は田中に殴りかかった。

「わっ、待て。誤解だ！話せば分かる」

田中が焦って木の後ろに隠れる。

誤解だと？俺は彼女の方を振り向く。

彼女は俯いて、体を震わせて泣いていた。

俺は彼女の元へ駆け寄る。

「……夏木くん！」

彼女の方から俺に抱きついてきた。

「こ、怖かった……！」

泣きじゃくりながら俺にしがみつく彼女。俺も彼女を抱きしめ返した。

おい、田中！これのどこが誤解だ？

やはり俺は田中を殴るべきだと思った。いや、これは警察沙汰かもしれない。が、気付いた時には、田中の姿はこつ然となくなっていた。くそつ。逃げられたか！

田中の事は後回しにするとして、今は彼女の精神状態が心配だ。

こんなに怯えてしまうなんて。一体、何をされたんだ？もしかして……。

彼女の姿を見ると、服装に乱れはなかった。よかった、未遂だったようだ。しかし、キスぐらいはされたかもしれない。俺は田中を絶対許さない！思わず彼女を抱く腕に、力が入った。

彼女の髪の毛の香りが俺の鼻腔をくすぐる。そして密着する体……。女の子って、柔らかくって小さくて可愛いよな。えへへ。

「……何が『えへへ』だ！……やばい。やばいぞ。
こんな時なのに、何だかエッチな気分になってきた。」

そういえば以前にも、彼女に中庭で抱きつかれたことがあった。その時は気分が悪くて、ふらついたとかって言ってたけど、あれも相当やばかった。もう少し、彼女が俺から離れるのが遅かったら、俺はどうなってたか分からない。

今回は一方的に抱きつかれたのではなく、俺たちは抱き合っている。密着度が違う。彼女の背中に回した手が、無意識にブラジャーのラインをなぞっていた。俺は慌ててやめる。

『ラストチャンスだよ、夏木氏』

そうだ。ラストチャンスなんだ。ここでキレて、同じあやまちを繰り返すわけにはいかない。

今、彼女は奇跡的に俺を頼ってくれている。

心の底から俺の事が嫌いだったら、抱きついたりしないよな。

まだ、僅かでも望みはある……？

いや、望みがあるとか、ないとか関係なく、もう素直に言っしまおう。俺がずっと言いたくて仕方がなかった、そのたった一言を。

「……好きだ」

こんなに簡単な言葉なのに、どうして今まで言えなかったんだろう。

俺は今まで、言い訳することばかり考えていたような気がする。

こんな状態の彼女に告白するのもしかと思つが、島崎さんの言った『ラストチャンス』という言葉に、後押しされてしまった。

「好きだ。ずっと、好きだったんだ」

一度言つてしまえば、止まらなくなった。馬鹿みたいに「好きだ」を連呼する。

「私も夏木くんが・・・好き」

彼女が俺のことを好きと言つた気がする。信じられない。俺は自分の耳を疑つた。

しっかり抱き合つて、お互いの顔が見えない状態だったので、俺は背中に回していた手を彼女の肩に置きなおした。

彼女の顔を覗き込む。

「もう一回言つて？」

彼女は頬を赤く染めて、俺の目を見て「好き」と呟くように言った。

奇跡だ。奇跡が起きた。

俺は調子に乗つて、彼女にキスをしようと思つて顔をゆっくり近付け・・・

・もうちよつとで、唇と唇が触れそうなところで・・・

「俊也！浮気は駄目！」

寸止めをくれました。

「花園・・・」

花園が綺麗な顔を歪めて立っていた。

そんな顔にさせているのは俺なんだよな・・・。罪悪感が湧いてくる。

「俊也は貧乳だったら、何でもいいんだよね！私という彼女がいるくせに」

は？何を言い出すんだコイツは、と思ったが、桜井さんの顔がみるみる青ざめていくのがわかった。

そうか、桜井さん狙いなのか！

俺がここでビシツと言わないと・・・！

「誤解しないで、桜井さん。花園は彼女なんかじゃない。全くのデマだ！俺は・・・」

よし、ハッキリ言うぞ！花園ごめん。

「俺は、桜井さんの貧乳が好きだ！大好きだ！」

桜井さんが思いつきり怪訝けげんそうな顔をしたので、俺はアレツと思っ

「桜井さんのことが好きだ！大好きだ！」って言ったつもりだけど、何か間違った？・・・うわ、よく考えたら貧乳が好きだって言った気がする。やばい！

「もちろん桜井さんのことも好きだ！」

慌てて言い直すが、何だか貧乳がメインで桜井さん自身はおまけみたいになっちゃった。

13・告白〈夏木視点〉(後書き)

夏木、アホです。

14・ニセ夏木くん(前書き)

夕菜視点です。絶交宣言後に戻ります。

14・ニセ夏木くん

『サイテー！もう夏木くんとは絶交する！』

言ったのは衝動的にだったけど、後悔はない。

でも・・・何故だろう。心に穴がポツカリと開いてしまった。

やっぱり後悔・・・しているのかな。

そんな時、彼が現れた。

「ついてないな」

昼休み、私は何となくブラブラ歩いていた。そこをたまたま担任の先生に捕まって、プリントの束を押し付けられてしまった。

そのプリントが重いなんのつて。普通、女生徒には頼まない量だと思う。ギリギリ持てるけど、明日は絶対、筋肉痛だろう。

長時間持つてられず、足元に置いてしばし休憩。

「重そうだね。手伝うよ」

横からひよいっとプリントの大部分を持たれる。

えええ！？私は驚いた。

何故なら、プリントを持ってきている人は、全然知らない男の子だったから。

「これ、教室まで運ぶの？」

「う、うん。そうだけど」

親切で手伝ってくれようとしているんだろうけど、正直ありがた迷惑だった。人見知りの私には、こういうこともストレスになる。

しかも、この男の子はなかなかのイケメンだ。

「あ、でも遠いからいいよ」

「私が断ろうとすると、」

「確かにここからじゃあ、1組が一番遠いね。でもだからこそ手伝

うんだよ」

男の子はやっぱりと微笑んで歩き出した。

え？私が1組だって知ってるんだ！？

っていうか、ちょっと待って。今の微笑み方、誰かに似てる……。

とまあ、出会いはこんな感じで。

「でね、もうホントに可笑しいの！田中くんのやることってね、一々夏木くんに似てるんだけど、何て言うの？胡散臭いっていうか、キザったらしいんだよね。夏木くん本人がやる分には自然だった動作も、田中くんがやると何か変でさ。もう笑いを堪えるのに必死だよ。田中くんも見た目はなかなか男前なのにな」

「ふーん」

私の熱弁に対し、奈津の返事はじつに素っ気ないものだった。あ、奈津は興味ないか！。

しかし、田中くんには結構感心させられることも多い。私も今まで夏木くんを見てきたつもりだけど、田中くんのモノマネ（？）を見ることによつて、「そうそう、夏木くんってこういう仕草よくするよね」って改めて気付いたりするのだ。

田中くんは何で夏木くんのコピーをするのだろう？

聞いていいのかな？

結構仲良くなってきたし、聞いてみようかな。

「あ、桜井さん。和英辞典、貸してもらってもいいかな？」

田中くんがちょっと首をかしげて、私の返事を待つ。……ぷつ

！その首の角度といい、目線といい、まさしく夏木くんだよ！やばい。かなりやばいです。

「くくくくく……」

ついに笑ってしまった。中途半端に堪えたせいで、不細工な笑い声で……。

しかも、笑い出したら止まらなくなった。

「あははははっ！あははっ！あはっ！げふっ。げふっ……」
むせた。

「大丈夫？」

田中くんが心配そうに背中を擦ってくれる。

その眉をひそめた感じがまた似てて……。やめて、その顔！超ウケル！

笑っちゃって、何で夏木くんのコピーをするのか聞けないよお！

「いい加減うざい」

お弁当をつつきながら、奈津がうんざりした口調で言った。

「あっ、ごめん。田中くんの話ばかりで」

私ってば、田中くんのことを話すと、つい白熱しちゃうんだよね。

「違う。田中もうざいけど、あんたのカラ元気」

「え？カラ元気？私、普通に元気だけど」

奈津はじいっと私を見つめたかと思うと、それっきり無言になった。

何か、奈津を怒らせるようなことしたかな？

「放課後、中庭に来て。田中も連れて」

昼休みが終わるギリギリになって、奈津が口を開いた。

「中庭に？何で？」

「大事な話があるから」

奈津があまりにも真剣な面持ちだったので、私は黙って頷いた。

15・奈津の農

手入れの行き届いてない中庭。

草はボーボーだし、木が無意味に育ちすぎている。見通しが悪く、物騒な感じ。

学校内にこんな場所があつていいのだろうか。たまに疑問に思う。

「ごめんね。こんな所に連れて来ちゃって」

「いや、全然俺は構わないよ。それにしても島崎さん、何の話だろうね？」

田中くんは、またまた夏木くんみたいに首をかしげた。

私は笑いを堪えながら、会話を続ける。

「うーん、何だかよく分からないだよね。先に行って、待つとけつて。あ、そうだ、変な頼み事もされてるの」

「頼み事？」

「そう。中庭の奥に進むとね、木の枝からヒモが垂れてるんだって。そのヒモを田中くんにつ張ってもらって。・・・あ、あれだよ。きつと」

私たちが中庭をしばらく歩いていくと、ヒモが垂れた木が現れた。ヒモの位置が高いな。なるほど、私や奈津じゃ届かないから、田中くんに頼むしかなさそう。

「じゃ、ぐいつとお願ひします」

「え・・・と、桜井さん。これ怪しくない？」

田中くんがヒモに手を掛けて躊躇している。

「怪しいって何が？」

「これ引つ張つたらどうなの？何だか嫌な予感がするんだけど」
むう。男のくせに意外に小心者なんだね。夏木くんだったらきつとこんな態度取らないよ。

「奈津は私の友達だよ？私が嫌がるようなこと絶対にしないよ！」

私は苛々した。さつきから、田中くんの振る舞いが全然夏木くんらしくない。

「・・・わかったよ。じゃあ、引っ張るけど、どうなっても知らないからな！」

田中くんが投げやりに言って、ヒモを勢いよく引いた。

「きゃー！」

私にとって、この状況は地獄絵図そのものだった。

「うわっ！何だこれ？桜井さん、どうなってるの！？」

田中くんは足をふらつかせて、私に近付いてくる。

やだ！来ないで！！

私は逃げようとしたが、足がもつれて尻餅をついてしまう。最悪なことに、その私に田中くんがつまづいて、上に覆いかぶさってくる。

大接近する私と・・・カエルやトカゲ。ぎゃー！

そう、何故かあのヒモを引いた直後、私の大嫌いなカエルやトカゲが、上から田中くんに降り注いだのだ。

私はカエルやトカゲから逃れる為に、必死に手足をバタつかせて田中くんを遠ざけようとする。

ポロツと田中くんから落ちたカエルが、私のオデコに飛び乗った。

「×！？」

恐怖のあまり、声にならない。

嫌！誰か助けて！・・・夏木くん！！

我慢の限界に達した時だった。私に覆いかぶさっていた田中くんの体がフワリと浮いて、カエルとトカゲと共に飛んでいく。私のオデコのカエルも、自然にどこかへ跳ねていった。

「田中！お前、何してんだよ！？」

夏木くんだ！本物の夏木くんだ！！

どうやら夏木くんが田中くんを投げ飛ばしてくれたようだ。
カッコイイ……。

私は恐怖から解放されて気が緩んだのか、涙が溢れてきた。

夏木くん、夏木くん、夏木くん！！

彼への想いが溢れて止まらない。

夏木くんは田中くんと何か言葉を交わした後、私の方へ駆け寄ってきた。

「夏木くん！」

私は何の躊躇ためらいもなく、彼に抱きつく。

「こ、怖かった……！」

思わず腕に力が入った。彼も私を包み込むように抱きしめてくれる。すごく安心できる腕の中だった。

彼の体温が心地いい。心臓の鼓動も聞こえる。

トクトクトク……。彼の心音が早鐘を打つように、高鳴っている。

ギュツと私の背中に回された腕に力が入った。きつく抱きしめられると、彼の存在を強く感じられて嬉しかった。

あれ？

しばらくして、私のお腹の辺りに硬いものが当たるようになった。さっきまではなかったのに、何だろう？夏木くんも私もずっと同じ体勢なのに、どこから湧いてきたの？……気になる。

「……好きだ」

耳元で彼が熱く囁いた。私はもう、謎の硬い物体について、考えるどころではなくなっていた。

「好きだ。ずっと、好きだったんだ」

何度も繰り返される甘い囁き。頭がクラクラした。

夏木くんが私を好き！？そんな夢みたいなことって……。でも、

こんなに何度も言われると、本当に好かれてるんだって思ってしまった。

「私も夏木くんが・・・好き」

私も彼に応えるように告白した。

彼が私の顔を覗き込む。

「もう一回言って？」

とても真剣な眼差しだった。

「好き」

ちゃんと向き合って言うのは照れたけど、促されるままに言った。

彼の顔がゆっくりと私に近付いてくる。

これって、もしかしてキスしようとしてる？

わっ、とうとうファーストキスだ！

彼の鼻先が私の鼻を掠めた。唇ももう少しで重なりそう。

あっ、目を閉じた方がいいよね？

私は覚悟を決めて、目を閉じた。

しかし、そううまくはいかなかった。

「俊也！浮気は駄目！」

急に割り込んできた声に反応して、彼の動きがピタッと止まる。

この声は・・・。

「花園・・・」

夏木くんが呟いた。そう、この声は花園香苗だ。

15・奈津の罖（後書き）

奈津、やること荒いつす。

さて、次回でようやく夏木視点に追いつきます。

16 ・どんな夏木くんでも好き

「俊也は貧乳だったら、何でもいいんだよね！私という彼女がいるくせに」

花園香苗の発言に、私は動揺が走った。

そつだ。夏木くんには彼女がいたんだつた。貧乳だつたら何でもいいって・・・？

天国からいきなり地獄へ突き落とされたような気分陥っていく。

「誤解しないで、桜井さん。花園は彼女なんかじゃない。全くのデマだ！俺は・・・」

彼が真摯な表情で、私に語りかける。

『彼女なんかじゃない』という否定の言葉に安心しつつも、彼の真剣な態度に、思わず息を呑んだ。

「俺は、桜井さんの貧乳が好きだ！大好きだ！」

彼がとても熱い口調で言い切った。

・・・聞き違いでしょうか。私の貧乳が大好き？まさかこの場面で、そんな告白を受けるとは思っていなかった。私は首を傾げてしまう。

そして彼が私の様子を見て、焦ったように、

「もちろん桜井さんのことも好きだ！」
と言った。

何だか、取って付けたような言い方に私は愕然となる。

妙に気まずい空気が流れた。何故か三人とも動きが止まっている。

一番に沈黙を破ったのは、花園香苗だった。

「・・・俊也ってバカ？」

花園香苗が溜め息をついた。

夏木くんもガクツと肩を落として溜め息をつく。

花園香苗はちよつと小バカにした感じの笑みを浮かべた。

私はその態度にちよつとムツとして、

「夏木くんがバカでも、私は好きだよ！」

思わず庇^{かば}っていた。

私の発言に彼は目を丸くするが、

「あの、バカだけじゃなくて、・・・ちよつと変態も入ってるかも
しれないんだけど」

またしても問題発言をして、私を困惑させた。

ちよつと変態って、どういうこと!?

貧乳フェチといい、私に理解できないことが多すぎる。

「いいよ、何でも。私はどんな夏木くんでも好きだよ」

私は彼の全てを受け入れてみようと思った。

私の存在が貧乳の次でも構わない。例え貧乳の次でも、私の事を
好きでいてくれるのならいい。

カエルが降ってきてパニックに陥った時、私は無意識に夏木くん
に助けを求めていた。絶交した相手に助けを求めるなんて、自分で
も呆れてしまう。

いろいろあつたけど、結局、私は夏木くんが好きなんだ。

惚れた弱みかな。多少のことには目をつぶっちゃうみたい。

「じゃあ、俺と付き合ってくれるの？」

彼が遠慮がちに聞いてきた。

そうか、お互いが好き合っていたら、付き合つのが道理だよな。

そこまで考えていなかった。

・・・付き合うつて、一緒に帰ったり、映画見に行ったり、水族館行ったりとかするんだよね？うわ、楽しそう！

私の目の前にバラ色の未来が映し出される。

「私でよかつたら、付き合ってください！」

「そんな。俺なんかには君はもつたいないくらいだよ。俺こそ、こんな俺でもよかつたら、付き合ってください」

彼は爽やかに微笑みながら、私に手を差し伸べた。

久しぶりの夏木スマイルに、私はうっとりしながら手を取る。

やっぱり夏木くんカッコイイな！。こんなカッコイイ人が私の彼

氏！？

私は顔がニヤつくのを止められなかった。

こうして私たちは晴れて恋人同士となった。

しかしお子様な私には、これから先に待ち受けていることを、知る由もなかった。

16・どんな夏木くんでも好き（後書き）

ここまで読んでくださって、ありがとうございます！

まだ二人の心にすれ違いはあるものの、ようやく付き合っことになりました。

夕菜の天然は曲者です。夏木の貧乳好きも今後の二人にどう関わっていくのか、どうか生温かい目で見守ってやって下さい。

17・夕菜との付き合い方<夏木視点>

俺は部屋に入るや否や、買い物袋を逆さにして、購入したものを床にぶちまけた。

絨毯じゅうたんの上に広げられた、スナック菓子、雑誌、シャープペンの芯、そして・・・コンドームとローション。

頭を抱え込んで、その場に力なく座り込む。

「何でこんなもん買ってんだよ・・・」

こんなもんとは、もちろんコンドームとローション。

今日からやっと付き合うことになって、まだキスすらしてないっていうのに。

浮かれた気分のまま、何気なく立ち寄ったコンビニで、コンドームが目に入った時はまだ平気だった。いつか、用意しなければいけない日が来るんだろうな、って思ったくらいで。

しかしその横に置いてあった物を見て、つい暴走してしまった。

ローション・・・桜井さんの可愛いおっぱいに塗って揉んだら、にゆるにゆるして気持ちがいいだろうなあ。えへへ。

・・・誰か俺を殺してくれ！

やっぱり胸だ。俺は貧乳に弱い。

何とか克服して、平常心を保てるようになりたい。せつかく付き合えるようになったっていうのに、俺がキレたら振られてしまうかもしれない。

桜井さんが俺と付き合ってくれるなんて、ホント奇跡だよな・・・

『桜井さんの貧乳が好きだ！大好きだ！』

俺が口を滑らせてこれを言ってしまった時、じつはもう終わったものだと思った。普通はひくだろ？

それなのに、俺のことが好きだって言ってくれた。俺は不安になって、変態だということも告げてみたが、『どんな夏木くんでも好き』ってさ。信じられない！

実際にキレた俺を見ても、彼女は『どんな夏木くんでも好き』と言ってくれるだろうか？

冷静になって考えてみると、きっと彼女は理解していないから、そんなことが言えたに違いない。

以前、何回か彼女の前で暴走したけど、今はあんなもんじゃ済まないと思う。

人間てのは欲深い生き物だ。どんどん欲望がエスカレートしていく。

彼女はそんな俺の胸の内を知らないから、好きだなんて言えるんだ。

もし俺の本性を知ったら、ビビって逃げていきそう……。

嫌だ。もう彼女を手放したくない。

是が非でも、貧乳で心を乱さないようにしなくては！

でもどうすればいいんだ。貧乳が貧乳に見えない催眠術とかかけてもらうとか……？バカみたいだが、かけてもらえるなら、本当にかけて欲しいくらいだ。

俺は今まで、性欲に関してわりと淡泊な方だった。だが桜井さん相手だと、どうやら違うようだ。困ったな。

俺はあぐらをかいて座り直す。

とりあえず、気晴らしにスナック菓子の封を開け、口にほおばった。食べながらふと考える。

彼女は性欲なんてあるのだろうか？

彼女の無邪気な笑顔が頭に浮かんだ。

「……性欲なさそー。でも胸を触った時、反応はあったから慣らしていったら芽生えるかな？」

「って、俺またエロいこと考えてるし！」

彼女は純粹な子だから、最初からエロ全開でいくと、絶対ひく。

まずは手を繋いだり、キスからだ。ここまでなら、キレてない俺でもできる行為だし、乙女思考の彼女もOKだろう。

少しずつ彼女との距離を縮めていきたい。そして、ゆくゆくは胸を触ったり……このローションでにゆるにゆるに……。

ああ、俺はまたエロいことを考えてしまいました。

「ごめんなさい、桜井さん！」

俺は妄想で彼女を汚してしまい、罪悪感から土下座した。

その時、ガチャツと扉の開く音がする。

「あれ？俊也帰ってたのか。ってお前、何で拝おがんでんの？そんなもん相手に」

兄貴は俺がまだ帰ってないと思っていたようで、ノックもなしにいきなり部屋に侵入してきた。

土下座で手をついたすぐ先には、ローションとコンドームが置いてある。……これらに拝おがんでいるように、見えなくはない。

「ほつといて……」

俺はそのまま絨毯に突っ伏した。

「うつす」

背中を叩かれ、振り向くと田中のニヤけた顔があった。

「あ！お前、警察に行くぞ」

昨日、彼女に襲い掛かる田中の姿を瞬時に思い出した。
現在、俺たちは登校中。学校までの間に交番があったはずだ。

「えっ？何で。もしかしてまだ誤解してんの？」

「誤解？」

「桜井さんから聞いてない？島崎さんにはめ嵌められたって」

「聞いてない」

昨日は桜井さんと付き合うことになって浮かれていた。だからいつの間にか、花園がいなくなっていたことにも、気付いてないぐら
いだ。

田中のことなど、たった今まで忘れていた。

島崎さんか。そういえば俺も島崎さんに指示されて、中庭に行っ
たんだった。

田中に俺が来るまでの経緯を話させた。

事情が分かれると怒りは収まり、逆に憐あわれみすら感じた。

「それは災難だったな」

「まあな。上から両生類やら爬虫類を浴びせられるわ、夏木にぶっ
飛ばされるわ、家に帰ってもトカゲが一匹、服の中から出てくるわ
で、ほんといい迷惑だよ。でもお前ら、おかげでうまくいったんだ
ろ？」

「ああ」

田中の手前、素直に喜べなかった。

こいつも桜井さんのこと、好きだったんだよな。

花園も傷つけた。自分の幸せが、人の不幸の上にある。とても申
し訳ない気持ちになってしまう。

「そんな顔すんなよ。俺は勝ち目がないのは、分かってたんだ。桜
井さんの気を惹く為とはいえ、夏木のモノマネをした俺は、最初か

ら敗北したも同然だったのさ。素の俺が出ると、彼女めちやくちや不機嫌だったし」

「俺のモノマネ？」

何だよ、それ。俺ってモノマネされるような個性的キャラなのか？

軽くショックを受けた。

17・夕菜との付き合い方〈夏木視点〉(後書き)

読んでくださって、ありがとうございます！

これから徐々に下ネタ色が濃くなりそうな予感がします。

18・欲求不満<夏木視点>

「まあ、俺のことは気にせず、思う存分イチャついてくれ。俺はもう次のターゲットへ向けて動き始めている」

田中は淡々と告げた。

次のターゲットだと？もう心変わりなのか。

桜井さんへの気持ちはそんな程度だったのか……。腹が立つよ
うな、安心したような微妙な感じだ。

俺が複雑な顔をしていると、田中が急にカバンの中を漁り出した。
「そうだ。これやるよ。桜井さんのイメージにぴったりだったから、
思わず買ったやつなんだ。次のターゲットにはまた別のを買ったか
ら、不要になった。ピンチの時に開けてくれ」

田中はプレゼント用にラッピングされた箱を取り出した。大きさは
辞書ぐらい。ピンクのリボンが可愛らしく飾られている。一度包
装を解くと、俺には戻せそうにない。

「何が入ってるんだ？」

綺麗にラッピングされているものを、わざわざ開ける気がしな
かった。

「いいから、ピンチの時に開けてみてくれ」

田中は強引に俺に手渡すと、足早に去っていった。

どうせ行き先は同じで学校なんだから、一緒に行けばいいのに、
変な奴だな。

俺は押し付けられた物を、とりあえずカバンに仕舞い込んだ。重
さはさほどない。田中がくれる物だったら、どうせ大したものじゃ
ないだろう。俺は深く考えなかった。

「夏木くん、おはよう」

後ろから柔らかな声がして振り向くと、桜井さんが息を弾ませて
立っていた。そして俺の隣に遠慮がちに並ぶ。

もしかして、俺の姿が見えて、走って追いついて来てくれたのか？だとしたら、めっちゃくちゃ嬉しい。

「おはよう」

俺が挨拶を返すと、桜井さんは照れているのか、俯いて頬を赤らめた。

初々しくて可愛いな。この子が俺の彼女なんだよな。

じーんと嬉しさが込み上げる。

「今日も一緒に帰っていいかな？」

何か会話を、と思って今日の帰りのことを切り出した。

彼女は小さく頷く。よっしゃー！

ちなみに昨日も一緒に帰った。たわいのない会話をしながら。

そして今日も一緒に帰る。ああ、幸せだなー！

そうだ。島崎さんにお礼言つとかないと。

やり方はどうであれ、俺達のために一肌脱いでくれたみたいだし。

桜井さんと一緒に1組の教室に入った。

島崎さんは既に登校していて、席に座っていた。

挨拶を交わした後、早速、本題に入る。

「島崎さん、昨日はありがとう」

「別に。夏木氏の為じゃなくて、夕菜の為だから」

冷たい口調だった。照れ隠しではなく、本気で冷淡な島崎さんの様子に、俺はいささか傷付く。

何故だ？昨日は俺達の仲を取り持ってくれたのに。そんな態度をする理由が全くわからない。

「奈津、そんなきつい言い方しないで……」

桜井さんが窘めても、島崎さんは「ふん」と言って、そっぽを向いてしまった。

「ごめん。今日は奈津、たまたま不機嫌なだけだから」

代わりに、桜井さんに謝られた。

「いや、俺は気にしてないから。それじゃ、また」

後味が悪かったが、始業時間が近付いていたので、俺は自分の教室へ向かった。

たまたま廊下で花園と擦れ違う。昨日までなら会つとすぐ抱きついてきたのに、今は声すら掛けて来なかった。

無視か。ま、仕方ないよな。

放課後、約束通り桜井さんと一緒に下校した。

彼女との会話は楽しいし、癒される。

帰り道が分かれた後も、その余韻に浸りながら家路についた。

次の日も、一緒に下校した。

土曜日に水族館へ行く約束をする。楽しみだ。

そして土曜日、水族館で初デートだ。大きな水槽の前で、無邪気にはしゃぐ彼女がとても可愛かった。

日曜日は独りで勉強した。それでも一応、俺は受験生なのだ。

月曜日、今週も一緒に下校する約束をし、幸せな五日間を送る。

土曜日は彼女と一緒に図書館で勉強をした。

日曜日は独りで勉強。

また月曜日。わざわざ約束しなくても、一緒に帰るのが当たり前になる。

土曜日、彼女の買い物に付き合う。婦人服を見て回る経験は初めてだったので、とにかく新鮮。彼女は何を着ても可愛い。

デートが終わって、家に帰っても、彼女のことを思い出す。

今日も楽しかった。

その晩、俺は夢を見た。もちろん彼女との夢。

しかし、内容は口に出して言えないぐらい、エロい夢だった。

「わっ」

目が覚めて、慌てて股間を確認する。確認して一安心つく。

よかった、出してない。

いや、全然よくない。夢精こそしなかったが、欲求不満だ、完璧に。

俺は彼女の胸を見なければ、キレずに済むと思って、この三週間必死に目を逸らしてきた。

大好物が目の前にあるのに、気付いていない振りをする。それは至難のわざだった。

そろそろ限界だな。

俺は自分の不器用さに腹が立った。

勉強やスポーツはそこそこ器用にこなせるのに、恋愛は全く駄目。その証拠に、キスをするどころか、未だに手すら握れていなかった。

タイミングが分からない。俺達の交際は健全そのもので、そういうムードにならないのだ。

彼女、隙だらけのようで、隙がない……。

おっぱい触りてー。

19・え？触っていいの？<夏木視点>

月曜日、いつものように桜井さんと仲良く下校。

だが、俺は……ついに彼女の胸をチラ見してしまった。
駄目だと思いつつ、胸元に目がいく。

控え目な膨らみが何とも可愛い。俺の乾いた心が潤う。
つて、『乾いた心』って何だよ。ただの欲求不満なくせに。
我に返っては自己嫌悪に陥った。

ちよつとだけ、一瞬、指で突つただけでも駄目かなあ……。

「夏木くん？」

桜井さんが首をかしげて俺を見つめていた。
しまった。また、胸の方に意識が飛んだ。

彼女が話してる最中に、上の空だったなんて俺は最低な奴だ。

「あ、ごめん！その……」

歯切れの悪い俺。全く進歩がない。

「……胸、触る？触ってもいいよ」

突然、彼女がとんでもないことを言い出した。

「えええええーっ!？」

俺は驚きすぎて思わず叫ぶ。

一方、彼女は恥ずかしそうに頬を染めて俯いていた。
胸、触ってもいいって？マジかよ……。

手がスツと胸を目がけて伸びたが、すぐ近くを通行人が横切つて
いくのに気付き、思い留まった。

俺は辺りをキョロキョロ見回す。人通りはそれなりにある。こん

なところで触るわけにはいかない。

「今から家に来ない？」

俺は大胆にも、彼女を家に誘っていた。

彼女を俺の部屋に上げ、ベッドをソファ替わりにして座らせた。俺も彼女の隣に腰を下ろす。

何故、彼女は胸を触っていいと言い出したのか。今の俺は舞い上がっていて、考える余裕はなかった。

とにかく、一刻も早く触りたい。

俺が彼女と向き合っていると、彼女はビクツと体を強張らせた。よく見ると、体が少し震えている。

もしかして、怖がってる？

俺が手を伸ばすと、彼女は怯えるように瞳をギュツと閉じた。

真っ先に胸を触ろうとしていた手が、胸ではなく彼女の肩に触れる。

俺は彼女の唇に、自分の唇を軽く触れ合わせた。

「え？」

彼女がパチパチと瞬きしている。

「嫌だった？」

俺は不安になって聞いてみた。すると彼女は左右に何度も首を振って、「違う。違うの」と否定した。

よかった、と俺は微笑む。

「私をつきり、胸を触られると思ってたから、びっくりしちゃって」
彼女は顔を赤らめて、照れ笑いをした。

「今の、ファーストキスだったのに、不意打ちだったからよく分かんかった。もったいない事しちゃったな」

ちょっと拗ねた感じの彼女が可愛くて、俺はまたキスがしたくな
った。

「じゃ、仕切り直して、も一回」

「ええっ？何だか、そうやって予告されると恥ずかしいかも……」

彼女は恥ずかしがったが、俺が顔を近付けると目を閉じた。俺は
彼女を見ていたくて、あえて目を開けたまま彼女に口付ける。彼女
の長い睫毛がとても綺麗だと思った。

柔らかい感触を、じっくり堪能する。

キスの最中、急に目を開けた彼女と、俺の目が合う。彼女は驚い
て、体を引いた。

「な、な、何で、目を開けてるの？」

「何でって、見たいからだよ。桜井さんも、途中で目を開けたのは、
俺が見たかったからじゃないのかな」

「そ、そうだけど。でも、でも……」

「ね、夕菜って呼んでいい？」

「ええっ？」

俺は動揺する彼女が可愛くてたまらない。俺ってちょっとSっ気
があるのかも。彼女を名前で呼びたかったのは前からだけど、あえ
て今言つて、更なる動揺を誘う。

「夕菜」

呼ぶと彼女が顔を手で覆った。

「は、恥ずかしいよ！」

「可愛い」

俺は彼女をそっと抱きしめる。

うわ、俺、今すっげー幸せかも。

「嬉しい」

彼女が俺の腕の中で、小さく呟く。

「私ね、ホントは胸触って欲しくなかったんだ」

え？何だって？

「なんだか夏木くん、怖かった。あ、でも、今は怖くないから」
彼女は上目遣いで、俺に微笑んだ。

「ごめん。俺、自分の事ばかりで……」
俺は心から反省した。

「私こそごめんね。夏木くん、元気なかったから、元気付けようと思っ
て言ったんだけど、私ってば怖気づいちゃって」

彼女のそんな思いやりも知らずに、俺は……。

よかった！胸を触らなくて。

彼女の髪や背中を撫でたり、手を握ったり、キスをしたり。他愛
のない会話をしながら、俺は繰り返した。

彼女も俺の背中に手を回し、応えてくれる。

すごくいい雰囲気だった。

いい雰囲気なんだけど……、ここで胸を触ったら元の木阿弥もくあみだよ
な。

でも、抱き合つと胸が当たる。意識せずにはいられない。

これって蛇の生殺しってやつ？

20・【続】え？触っていいの？<夏木視点>

触りたい！このシチュエーションで触らなかつたら男じゃねえ！！
いや、だから駄目だつて！さつき本当は胸を触って欲しくないっ
て、聞いたばかりだろ。

彼女を抱きしめながら、俺は自分の欲望と戦っていた。
つくづく進歩のない俺。

「胸、触ってもいいんだよ？」

彼女が俺にぺたつとくつついたまま言った。

何い？触っていいの？いや、しかし、

「さつき、触って欲しくなかつたつて」

「うん、さつきは怖かったから。でも今は怖くないよ。緊張はする
けど……」

彼女は俺を見て、大丈夫だよと笑顔を見せた。

確かに、怯えてはいはいないようだ。

こんなにおいしい展開が続いて、いいのだろうか？

絶対、何か落とし穴がある。そんな気がしてならない。

でも俺はもう我慢が出来なかつた。

「じゃ、触るよ？」

俺は不安に思いながらも、恐る恐る彼女の胸に手を重ねた。

う、わあ……。久しぶりの感触に思わずつつとりする。

「こんな小さい胸、ずっと嫌だつた」

彼女がぼつりと語りだす。

「何で！すごく可愛いのに。俺は小さい方が好きだよ」

俺は両手で揉み揉みしながら、胸への愛情表現を示した。

「ありがとう。夏木くんが喜んでくれるから、この貧乳も案外捨て
たもんじゃないなつて、今は思える。んっ」

服越しに胸の先端をぎゅっと摘んだら、彼女がびくつと身を反ら

した。

可愛い！

俺は彼女をベッドに押し倒して、夢中になって胸を弄いじった。
途中から、服が邪魔に思えてきた。直に触りたい。おっぱいが見たい！

彼女の服を上にくくり上げた。服に隠れていた、白いスポーティな感じのブラジャーが現れる。

「可愛いブラでごめん」

何故か彼女が謝った。

俺的にはブラジャーなど全く気にならない。どうせ脱がすんだし、むしろノーブラでもいい。

「夕菜だったら、何を着ても可愛いよ」

お世辞ではなく、本当にそう思う。でもやっぱり、ブラジャーは邪魔なので、掴んで上にずらした。

初めてお目にかかる彼女の胸。

透き通るように白い肌。小さめの膨らみ。

そして、そして！桜色の、乳輪と乳首！！

しかも乳輪は俺好みの大きさで、乳首とのバランスも絶妙である。

このおっぱいは俺の理想そのものだった。

うおお！奇跡だ！！貧乳の神様ありがとう！！！！

そんな神様がいるのかは知らないが、俺は感謝の意を表す。無意識に合掌もしていた。

不思議そうな顔をしている彼女と目が合う。

そこで俺は、自分がとんでもなくキモイ事に気付いた。

彼女の胸の前で、両手を合わせて何やってんだか！貧乳の神様に祈りを捧げるなんて、変態丸出しだ……。

「これは……その、頂きまーすっ！！」

食事前の『頂きます』の振りをして、左おっぱいにパクツとかぶりついた。これはこれで、バカ丸出しだった。

しかし自分の失態など気にならないぐらい、俺は舞い上がった。彼女の可愛いおっぱいをついに口に含んでしまつて、興奮は絶頂に達する。

手も胸に添えて、優しく揉みしだきながら、口で先端を吸つた。舌先で突いたり、歯で甘噛みしたり、思いつく限りのことを試みる。

直に触れる彼女の胸はすべて肌触りがよく、ほど良い弾力と柔らかさを兼ね備えていた。

彼女の汗なのか、俺の手の汗なのか、はたまた俺の唾液なのか、胸は徐々にベトベトになつていくが、それすらも興奮のエッセンスだつた。

「あつ……」

時折漏れる、彼女の喘ぎが更に劣情を煽り、ひたすら胸に触れ続けた。

暴走した俺はもう立ち止まることはできない。……彼女が泣き出すまでは。

「うっ……うえっ」

いつから泣いていたのだろう。彼女は声を詰まらせて泣いていた。急激に興奮から冷めていく。いきり立っていた股間もあつという間にしぼんだ。

何て事をしてしまったんだ！彼女は純粋な子だから、いきなりエロ全開は駄目だつて分かつてたのに……。……どうしよう。

「ごめん……」

彼女の頭を撫でようとしたが、彼女に手を払いのけられてしまった。

彼女は泣きながら起き上がり、乱れた衣服を整え始める。

ど、ど、どうしよう！ピンチだ！大ピンチだ！！

俺は動揺のせいか、意味もなく部屋を見回した。
本棚の空きスペースに、無造作に置かれた田中のプレゼントが目に入る。

『ピンチの時に開けてくれ』

田中のセリフが脳裏によぎった。

そうだ。今がそのピンチの時というやつだ。今開けなくて、いつ開ける？

藁にもすがる思いで、田中のプレゼントを手を取った。

彼女の前で、ラップリングをビリビリ破る。包装紙を取り去ると白い箱が出てきた。そして白い箱に手を掛け、彼女の視線を感じながら、ゆっくりと開ける。

中に入っていたものは、なんと！なんと……？

俺は箱を一旦閉じて、深呼吸をした。

何だか、有り得ないものを見たような気がする。

ちよつと気持ちを落ち着けてから、恐る恐るもう一度箱を開けた。彼女もじいっと箱を見ている。

再び見た箱の中身はさつきと一緒で、何故か白い猫耳のついた力チューシャだった。

幻覚でも見ているのかと思い、手に取って確認する。猫耳は白いふわふわの毛並みだった。

実際に触れられることから、これは現実だと思い知らされる。

田中よ、これを俺にどうしろと？

彼女の頭に付けるのか……？

彼女の様子をチラッと見ると、瞬間冷凍できそうな冷気をたたえた目で俺を見ていた。

あのヤロー！何がピンチの時に開けてくれ、だ！

状況が悪化しただけじゃないか！
こんなもん、どんな時でもいらないだろ！

どうしよう。

ああ、本当にどうすればいいんだ。

これ、俺が買ったと思われてるだろうな……。

この冷めきった雰囲気の中、彼女の頭に猫耳を付ける勇氣もなく、かといって引つ込みのつかない状況に焦りが募る。

極限の焦りからか、俺は自分でも説明のつかない行動に出た。

猫耳を真上に掲げ、ゆっくりと自分の頭に装着したのだ。

「えっ？えええーっ？」

彼女が目をまん丸に見開いて、驚き叫ぶ声が部屋に響いた。

21・夏木の過去<夏木視点>

「うるさい!」

怒鳴り声とともに勢いよくドアが開かれ、いかにも寝起き顔の兄貴が部屋に押し入って来た。

最悪……! 兄貴いたのか!

本当に最悪としか言いようがない。

兄貴の乱入のおかげで彼女の叫び声は止まったが、俺は猫耳、兄貴は上半身裸で下半身はブリーフのみ着用。お互いにとんでもない格好だ。

「え……? あれ?」

怒鳴り込んできたくせに、彼女を見るや否や、兄貴は当惑の色を見せた。きつと寝ぼけていて、頭の回転が鈍くなっているのだろう。

俺は新たな問題に頭を抱えた。

どうすればいいんだ?

「や、やあ、いらつしやい。何か飲み物でもいかが?」

俺より先に兄貴が口を開いた。手で髪の毛の寝癖を整えながら、彼女に笑顔を振りまく。今さら寝癖を直したところで、どうにもならない事は言うまでもないが。

「い、いえ、お構いなく」

ぎこちなく彼女が答えた。一瞬、兄貴と視線を合わせるが、すぐに俯いてしまった。

無理もないと思う。兄貴はパンツ一丁なので、さぞかし彼女は目のやり場に困っていることだろう。

「兄貴、出て行ってくれない?」

俺はようやく会話に割って入った。

何だかもう、どうにもならないので、とりあえず兄貴には出て行ってもらいたい。

「あ、ああ。じゃあ、ごゆっくり」

兄貴には珍しく、大人しく背を向けた。ブリーフが尻の割れ目に思いつ切り食い込んでいる……。

「ごめん！本当にごめん！いろいろごめん！全部ごめん！」

ドアが閉まった途端、必死に頭を下げた。

「うっん。夏木くんは悪くないよ。私が悪いの……」

彼女は何故か自分を責めた。これは予期せぬ出来事だ。

どう考えて俺の方が悪いよな？兄貴のことにしても、俺の身内なんだし。

「どうして夕菜が悪いの？俺の方が全面的に悪いのに」

「よく考えたら、私が子どもっぽいからいけないの」

彼女の思考についていけない。何を言い出すんだ。子どもっぽいっていうか、ウブなところは彼女の長所じゃないか。俺はそれを分かっている、彼女の許容量を超える行為に及およんでしまった。やっぱり俺が悪い。

「いや、無理をさせた俺が悪いよ」

「うっん。我慢が足りなかった私が悪いよ！」

彼女の主張に俺は言葉を失った。

我慢が足りなかっただって？何だよ、それ。ああいう行為って我慢なんかしてやるもんじゃないだろ？

『我慢』というキーワードを引き金に、俺の過去が蘇る。

そうだ。俺も我慢してた……。

高1の時、初めて付き合った人は2つ年上の先輩で、綺麗な人だった。告白されて舞い上がってしまったって、深く考えずに付き合いをOKしてしまった。中学時代の俺は成長が遅く、幼かったので、あまりモテなかった。だから、高校で初めて先輩に告白されて、ただ単に嬉しかった。そこに恋愛感情はなかった。

当時の俺は、夕菜みたいに純粹だった。何となく、恋愛ごっこに

憧れていた。手を繋いで歩いたりして大人ぶりたかった。しかし、先輩はそうではなかったようで……、恥ずかしながら俺はすぐに食われてしまった。俺はまだそこまでは望んでいなかった。もし抵抗したら、俺の方が力があるのだから、きつと拒否できたとは思う。でも我慢してしまった。一応気持ちいいし、全く興味なくはなかった。

そして、数回関係を持った後、あっさり振られた。付き合った期間は一ヶ月にも満たない、短い付き合いだった。別れた理由は『つまらない』のたった一言。あんなに俺のことが好きだって言ってくせに。それから俺は女性不信に陥った。

月日が流れると、冷静さも取り戻し、さすがに先輩のような女性ばかりじゃないと思えるようになるが、『つまらない』の一言がかなり応えていた。どうせ俺と付き合っても、つまらないからうまくいかない。そういう固定観念に囚われて、恋愛に臆病になっていた。

で、固定観念を覆してくれたのは夕菜の貧乳だった、というわけだ。大好きな貧乳に、つい目が眩くらんでしまった。でも貧乳なら誰でもいいわけではない。あれが彼女以外の人物の貧乳だったら、ああはならなかった。……と思いたい。いや、絶対ならない！

だけど、せつかく付き合うことになったのに、自分に自信がないのは相変わらずで、『我慢が足りなかった私が悪い』なんて言われると……。

「俺は夕菜にふさわしくない。やっぱり付き合うべきじゃなかったんだ。別れよう」

別れの言葉がスラスラと口から出た。

今度は彼女が絶句している。

「こんな俺に今まで付き合ってくれてありがとう。夕菜のこと、大好きだけど、俺では幸せにしてあげることができない。本当にごめん」

謝って済む事じゃないけど、それでも深々と頭を下げた。猫耳が少し下にずれる。

「げっ。取るの忘れてた。このままでは間抜けすぎる。」

俺は慌てて猫耳に手を伸ばした。

「だ、駄目！外さないで！」

彼女が素早く俺の手を掴む。

何故外したら駄目なんだ？

21・夏木の過去＜夏木視点＞（後書き）

読んで下さってありがとうございます！

そろそろ夕菜視点でいくか散々迷ったあげく、結局夏木視点にしてしまいました。

小説を書くって難しいですね。

22・夕菜のともでも発言<夏木視点>

「大好きって、私の胸のことが？」

猫耳の取り外しを制止させられたままの俺に、夕菜が言った。

「え？」

この流れで、何故、胸の話題になるのか全く理解が出来ない。

えっと、猫耳は？別れ話は？

それに、夕菜のことが大好きだって、さっき言ったよね？

「胸と、私とどっちが好きなの？」

「……そんなの答えられない。何で、全く次元の違うものを比べないといけないの？」

あまりにも馬鹿馬鹿しくて、答えることを拒否すると、彼女は悲しそうに眉をひそめた。そんな顔をさせてしまったことに心が痛む。彼女にとって、この問いはそんなに重要なのか？

「夕菜は、甘いもの好きだよ。例えばケーキが大好きだ。ケーキと俺とどっちが好き？」

悲しげな顔に罪悪感を抱いた俺は、彼女の意図を探るべく、逆に問い返した。

「えっ……」

彼女は目をぱちぱちと、何度も瞬きをする。

「胸と私って、ケーキと夏木くんみたいなレベルなの？」

「そうだよ」

俺は頷いた。厳密に言うと、胸は性的対象だし、ケーキを引き合に出すのは違う気もするのだが。

「なんだ、そうだったんだ……。てつきり夏木くんは私よりも胸が好きなんだと思ってたから」

「ええっ？」

寝耳に水だった。どうしてそんな誤解を……？

って、あれだ。告白のとき、『貧乳が好きだ』って言うってしまった。慌てて『桜井さんのことも好きだ』って言い直したけど、全然誤魔化せてなくて……。

そういやその後、きちんと訂正した覚えがない。彼女と付き合い合えるようになって、ただ浮かれていて考えもしなかった。

俺はとことん最低だな。

「ごめん。そんなふうに使わせていたなんて、やっぱり俺は駄目な奴なんだ。さつさと別れた方がいい」

「どうして！？私も夏木くんが好きだよ！別れる必要ないよ！」

彼女は俺の手をぎゅっと強く握った。彼女の真剣さが伝わってくる。しかし、俺の気持ちは変わらなかった。

「無理だよ。このまま付き合っても、きつとまた夕菜に我慢させたり、泣かせたりする。俺はもう同じ事を繰り返すのは嫌だ」

今までを振り返ると、貧乳に我を見失ってはかりだ。つくづく自分には愛想が尽きた。

「夕菜だったら、すぐ別の彼氏ができるよ」

「待ってよ！勝手に決め付けないで。両想いなのに別れるなんておかしい。納得できないよ」

「ごめん」

首を縦に振ろうとしない彼女に、俺は謝ることしかできなかった。

「……チャンスをちょうだい」

彼女が思いつめた顔で俺を見た。チャンスって？

「日曜日、夏木くんの家って、確かご家族が不在だったよね？」

「うん。午後なら夕方まで誰もいないけど？」

意図がつかめないまま、俺は聞かれたことに答える。

何を考えているんだろう。

「じゃあさ、日曜日、えっちしよう」

「え、え、え、えつち!？」

彼女の突拍子のない発言に驚き、声がひっくり返る。

「私とするの嫌？」

「嫌なわけがないよ。でも、俺は別れようって言ってるんだけど？」

「嫌じゃないなら、しよう」

だから、別れ話はどこへ？

彼女の瞳を見ると、何かを決意したかのような、ゆるぎない強い意志を感じた。

「私が受身だからいけないんだよ。もつと積極的になる。日曜日までに特訓してくるから、それまで別れ話は待つて欲しいの」

特訓で何だ？何を特訓する気なんだ？

「夏木くんがその成果を見て、それでも駄目だったらすんなり諦めるから。ね、お願い！」

彼女に必死にすがられて、俺は思わず頷いていた。

「ありがとう！」

彼女がぱあつと顔を輝かせて俺に抱きつく。

柔らかくて、いい匂いがして、気持ちいい。

だけど、俺は彼女の背に手を回そうとはしなかった。

穢れを知らない純真な彼女が好きだ。

だから、俺のせいで彼女が変わろうとしているのは、とても残念でならない。

しかし、天然であるが故の的外れの発言は彼女らしいと言えなくもない。

今日は月曜日だから、6日後か。

彼女は俺とえっちする気みたいだけど、きつと無理だ。

恐らく別れは免れられないだろう。

……こんな真面目なことを考えている俺だが、頭には猫耳が楽し

そつじに揺られていた。

22・夕菜のともでも発言〈夏木視点〉（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

早くも日曜日の話を書きたくてうずうずしているのですが、その前に夕菜視点が入ります。

明らかに夏木視点が多いですが、夕菜が主人公です。たぶん。

23・知識を得るには？（前書き）

久々に夕菜視点です。

23・知識を得るには？

夏木くんと言っちする。……本当に？

自分から言い出したくせに、早くもくじけそうになる。

あーあ。

自分のベッドに寝そべって、頭から布団をかぶって思いつきり自己嫌悪に陥った。

はしたない約束をしちゃった。夏木くんも少し呆れていた気がする。

でも、夏木くと別れるなんて絶対に嫌だし、あの時はああでも言わないと、本当に振られてしまいそうだった。

全ては私の頑張り次第だと思う。もう我慢しない。泣かない。

その為には強くならなきゃ。

まず、えっちなことを知ることから始めよう。今の私にはそういう知識が少なすぎる。

さて、どうやって知ろう？誰かに聞く？例えば奈津。

いや、奈津には聞けない。だって奈津は……。

あれは、夏木くと付き合うことになった日だった。

「奈津聞いて！夏木くと付き合うことになったの！」

家に着いた途端、奈津に電話をかけた。

夏木くと一緒に下校して、気分は最高に浮うわついている。

『ふーん。うまくいったんだ。よかったね、おめでとー』

奈津の抑揚のない声に、私は少し冷静さを取り戻す。

「なんか、冷たいね……」

『そお？ま、こっちとしては、やっと落ち着いてくれたかって感じだからね。何をそんなにこじらしていたのか知らないけど、あんた

達どう見ても両想いなのに、じれったくて苛々させられてストレスだったのよ」

「えー？でも、奈津が言ったんだよ、夏木くんには彼女いるって」
結局デマだったみたいだけど、こじれた原因の一つだ。

「はあ？あんた、最後まで話聞いてなかったの？自称だけどね、って私は言ったはずだけど」

「……頭が真っ白になってたから、聞いてなかった。ごめん」
自分のそそっかしさに辟易しながらも、結果オーライだよな、と慰めた。

『でも夕菜、大変なのはこれからかもね』

奈津の含みのある言い方に私はドキツとした。

「え？あ、夏木くんには嫌われないように頑張らなくちゃね！」

夏木くんみたいに格好いい人と付き合ったら、いろいろ心配だよ
ね。

「いや、そういう意味じゃなくてね。夏木氏、絶対むっつりスケベだから、苦勞するだろうと思ってね」

「え……」

奈津の千里眼の凄さに、私は絶句した。

もうすでに夏木くんのエッチな面は、何度か垣間見てしまっている。
る。

「きつとすぐ胸触ってくるよ。もしかしたら、キスよりも先だった
りして」

流石にそんなわけないか、と奈津は笑ったが、私は笑えなかった。
すでに胸は触られている。

『夕菜？』

私が黙ったままなので、奈津が心配そうに私を呼ぶ。

『……もしかして、もう触られた？』

奈津の問いに私は何も答えられなかった。

しかし、否定しないということは肯定してるも同然だった。

『あのエロ木め！手、早すぎ！最低！！』

奈津は『夏木』を『エロ木』と言い換えて憤慨した。

『あんな奴のために、一肌脱ぐんじゃなかった。夕菜、今からでも遅くない。別れな!』

「それでも好きなの!」

私は奈津に別れを勧められて、慌てて口を開いた。

別れるだなんて、とんでもない。

「奈津、いろいろ心配かけてごめんね。ありがとう。付き合えるようになったのは奈津のおかげだよ。ホント感謝してる」

この際、中庭のカエルとトカゲの仕掛けについては目をつぶる。

地獄絵図だったけど、その代償に夏木くと付き合えることになったんだしね。

『夕菜がそれでいいんなら、もうこれ以上言わないけど、エロ木に何か嫌なことされたら、ちゃんと私に相談しなよ』

奈津への報告の電話はそんな感じで終わった。

それからというもの、奈津はエロ木、エロ木と夏木くんがいない時はエロ木呼ばわりしている。私がいくらやめたと頼んでも、全く直そうとはしてくれない。

しかも夏木くんへの態度の悪さには、開いた口がふさがらない。

奈津は元々愛想のいい方ではないけど、明らかに冷たいのだ。

でも、夏木くんはちっとも気にしてない様子だし、彼の懐ふところの良さには感心する。さすが、夏木くんだ!

さて、そういうわけで、えっちの件は奈津に相談しにくい。かといって、あまり仲良くない子にも聞きにくいし。

……自力で調べるか。

調べるといえば、ネットが便利だよな。けどどうちのパソコンは家族で共有してるから、そんなこと調べられないし、携帯電話も料金が高いつてママがいつもうるさいし、無理だなあ。ネットカフェ

も近所にはないし。

仕方ない。明日、とりあえず学校帰りに本屋さんに寄ってみようかな。

24・えつちな本を探して

「昨日まではあんなにご機嫌だったのに、今日は溜息ばかりだね」
奈津に鋭いことを言われ、私は顔を引きつらせた。

今は学校のお昼休みで、食事中なんだけど、実を言うと食欲もあまりない。だから、いかにも悩んでますって雰囲気をかもし出しているのかもしれない。

でもごめん、奈津には相談しないって決めたから。

「そんなことないよ」

できるだけ何でもないように心掛けるが、奈津の目は誤魔化せないように、疑いの眼差しを向けてくる。

「エロ木と何かあったんでしょ？」

「な、何も」

「……ふうん。ま、いいけどさ」

奈津がどうでもよさそうに呟き、それきり会話も無くお弁当を食べた。

あ、エロ木って言わないでって、訂正するの忘れた。

いつか。もう、奈津がエロ木って言うのにも慣れてきた。慣れてって怖い……。

それにしても、昨日、夏木くんの家に行く前までは、私の思い描いていた交際そのものだったんだけどな。一緒に帰って、休みの日はデートして。

夏木くんが私の胸を物欲しそうに見てた時、つい触っていいよなんて後先考えずに言っちゃったけど、もし彼の視線に気付かない振りをしてたら、どうなってたんだろっ。

えつちなことにならないまま、付き合いを続けられた……？

いやいや、そんな子どもの付き合いで満足してるから、夏木くんに愛想を尽かされるんだよ。

今まで私よりも胸の方が好かれてると思っていたから、胸に夢中な夏木くんを見て、悲しくなって泣いたりしたけど、もう大丈夫。だって、ケーキと同じなんだから。

私がケーキに夢中になつてて、夏木くんが泣き出したらおかしいよね？

それと同じことだと教えてもらってから、何だか悩んでたのが馬鹿らしくなった。

私は強くなるって決めただから！

さて、放課後。

私は独りで本屋へやって来た。

今週はもう、夏木くんとは一緒に帰らないことにしている。

お目当ての本はどこにあるのだろう。

今まで、小説や少女漫画しか購入したことのない私にとって、えつちな本は未知のものだった。

興味の無いものは視界に入らないようで、よく通う本屋でも、どの辺りにそういう本が置いてあるのかが、全く分からないでいた。

ウロウロしていると、奥まったところの本棚で、裸の女性のイラストが表紙になった漫画が目に入った。

う。ありえない胸のでかさ……。

露骨な絵にびびる私。

本を手にとって見る以前に、そのコーナーに立ち止まることすら恥ずかしくて、素通りしてしまった。

あれって、男性用だよな。女性向けのえつちな本ってどこ？

かろうじて女性向けのそういう本があることは知っている。

学校に持って来ている子もいたし。
しかし、残念ながら、中身をまじまじと見たことがなかった。
こんなことなら見とけばよかった……。

「あれ？桜井さん」

びっくりしすぎて、心臓が止まるかと思った。

誰にも会いたくない時に限って、会ってしまっようだ。

「田中くん。こんなところで会うなんて偶然だね」

私はできるだけ平静を装った。

あのいかがわしいコーナーの前で会わなくてよかった……。本当によかった。

「俺、ここでバイト始めたんだ。もうレジに入るからさ、何か買うなら社員割引してやるよ」

えっ。

田中くんは親切で言ってくれてるんだらうけど、甘えるわけにはいかない。

だって買うのはえっちな本だよ？

というか、もうえっちな本の購入は無理だ。田中くんがいるレジで買えるはずない。あいにく、そんな勇気は持ち合わせていない。

私は肩を落として本屋を後にした。

家に帰ってから、私は途方に暮れていた。

特訓するって宣言したのに、資料が手に入らなくて何をしていたのかわからない。
どうしよう。

そのへんにえっちな本、落ちてないかな？

……って、そんな都合よく落ちてないよね。

何か他に手はないかな？

あっ！閃いた。^{STVC}

両親の部屋の押入れ……。

小学生の頃、怒られながらも家の中でよく隠れんぼをして遊んでいた。

その時、両親の部屋の押入れの中に、えっちな本を見たことがある。多分、パパのだ。

今もあるかな？

当時はそんな本を見つけて、すごくショックだったけど。

ともかく、両親がまだ帰って来ないうちに、押入れを見てみよう！私は意気揚々と両親の部屋の押入れに、体を突っ込んだ。

あ、あった！あったよー！！

まさかパパのえっちな本を見つけて、ここまで自分が喜ぶことになるうとは思ってもしなかった。

パパのだから、男性用のえっちな本だと思うけど、この際何でもいいや。

押入れの奥にひっそりと置いてあるえっちな本の中から、適当に漫画の雑誌を一冊手に取った。何となく、絵の方が分かりやすいよな気がしたので。そして、一冊しか取らないのは、一冊ぐらいなら二、三日借りてもバレないかな、と思って。

念の為、左から三番目から抜き取った事を覚えておく。パパは几帳面だから、この本の並びも意味があるのかもしれない。

よし！いよいよ特訓開始だ！

私は満面の笑みで、自室に戻った。

25・パパのえっちな本

私はパパのえっちな本を勉強机の上に置き、椅子に腰をかけた。表紙はナースの制服を着た女性だった。本屋で見かけたような、あからさまな裸体でないことに安堵する。

いつも温和で真面目なパパ。そんなパパがえっちな本を持っているなんて、今ひとつ実感が湧かなかつた。

でもここに確かな証拠がある。

無断で持ち出した罪悪感と、えっちに対する好奇心、そしてこのいけない本がパパのものであるという奇妙な感じ、私は複雑な心境のまま本を手にとった。

本を開く前に、ところどころページの角が折られていることに気付く。

パパは新聞や通販のカatalogなどで、気になるページの角を折る癖がある。

パパってば、こんな本にまで印を付けてるの？

私は苦笑いを浮かべながら、角の折られたページを開いてみた。

『この、メスブタめ！メスブタめえ！！』

『ひいつ、ひいつ！』

太った中年男性が、若い裸の女性を四つん這いにさせ、お尻を手でパンパン叩いているシーンだった。

「うわっ」

私は慌てて本から手を離れた。

一気に心拍数が上がった。

……パパってば、あんなのがお気に入りなの？

父親の知られざる一面だった。こんな知りたくなかった……。

私はパパの本に手を出してしまったことに深く後悔をする。

しかし、えつちな本で手に入るのは今のところパパの本だけだった。

せめて、角の折られたページはこれ以上見るまい。パパの威厳の為にも。

私は気を取り直して、本を開いた。

暴力的なシーンのある話を飛ばし、絵が生理的に受け付けない話も飛ばすと、残った話は一本だけだった。

パパ、本の趣味悪い……？

ともかく一話だけでも残ってよかった。

試しに読んでみる。

社内恋愛で男性が上司、女性が部下という設定のようだ。

絵の雰囲気は落ち着いた感じで、美男美女に描かれている。

しかし、男性の左手の薬指に指輪が嵌められていることから、既婚者であることが窺える。

えっ、不倫なの？

私は少々不快に思いながらも、読み進めた。

仕事中であるにも関わらず、二人は抜け出して、誰もいない資料室でキスを始める。

仕事は大丈夫なの？うわっ、こんな職場やだなー。

軽くツッコみつつ、ページをめくる。

キスのシーンが異様に長い。男女ともに濃厚に舌を絡めあっていた。

これって、ディープキスってやつだね。私はまだしたことないな。でも何だか、汚い……。

二人はキスを十分に堪能すると、男性が女性の服のボタンを外して胸を揉む。女性は時間がないから早く、早く来てと男性を急かした。

早く来てって何のことだろう？

男性が女性のスカートをめくり、下着を脱がした。女性の股間に手を当てた男性は、もうびしょびしょじゃないかと喜ぶ。

びしょびしょ？汗かな？

いつの間に脱いだのか、男性の下半身は露あらわになっていた。

何これ？漫画だからだよな？実際には有り得ないよね？

男性の股間にあるシンボルは、大きくなって上を向いていた。

学校の性教育で、男性器の勃起は習ったので知っているが、こんなに大きくなるものだろうか。子どもの頃、パパとお風呂に入っていたので、おぼろげな記憶ではあるが、男性のあそこは見たことがある。

アレがあんなに大きくなる？そんなわけないよ。きっと漫画だから大げさなんだよね。

自分を納得させて続きを見ると、男性の大きくなったあれが女性を一気に貫くところだった。女性が大きな喘ぎ声を上げている。

二人は立ったままなので、女性がバランスを崩し男性にしがみ付いた。男性は女性のお尻を掴んで、何度も腰を揺らしている。

バンバンとか、ぐちゅっぐちゅっとか、擬声語のオンパレードだった。

読み終えたあと、衝撃的過ぎてしばらく呆然となった。

ダメダメ。こんな最初の段階でくじけるなんて。特訓なんだから！

私は閉じた本をもう一度開き、分析を始める。

キスして、胸を触って、男性のアレを女性のおそこに入れる。

この三段階のうち、二つはもう経験済みだ。そう考えると意外に簡単な気がしてくる。

あとは無理な姿勢にも耐えられるように、柔軟体操でもしておこう。それと、初めては痛いと言ったことがあるから、痛みに耐える特訓もしなきゃね。

日曜日、積極的な私を見せて、夏木くんを驚かしてやるぞ。
私は強い決意を胸に、特訓を始めた。

25 パパのえっちな本（後書き）

こんなくだらない話を読んで下さって、本当にありがとうございました。
す。

書いていて、自分でも恥ずかしくなります。

あと何話ぐらいか未定ですが、終わりが見えてきましたので、ここ
数日執筆速度をあげています。

26. いざ日曜日！（前書き）

R15つてどこまでOKなんでしょうか？

これから最終回まで、エロ路線です。

もしR15の域を超えていたら教えて下さい。

26・いざ日曜日!

ついに日曜日が来てしまった。

出掛ける直前にシャワーを浴びて歯も磨いた。

前日までイメージトレーニングをみっちりやったし、あとは実際にどれくらい通用するかだ。

私は自分に大丈夫だと暗示をかけながら、夏木くんのお宅へ訪れた。

「こ、こんにちは」

「……どうぞ」

夏木くんは私を部屋に案内してくれたけど、いつもより無愛想だった。

「夏木くん、何か怒ってる?」

「怒ってるっていうか……あのさ、この前のって本気なの?」

冷静な口調の彼に、私は一瞬怯みそうになる。

きつと彼の気持ちは、別れ話をした時のままなんだ。

「もちろん本気だよ!今からえっちしようよ!」

「夕菜、無理しなくていいんだよ?やっぱりこういう事は、お互いが」

「私はしたくて、したくて、たまらないの!」

彼が話すのを遮って言った。

ここで引き下がったら、あとは夏木くんと別の別れが待っているだけだ。それが嫌で自分は変わったんだから。

「夏木くんは何もしなくていいから、私に任せて」

私はベッドに腰を下ろし、彼を手招きして呼んだ。

夏木くんは私に何を言っても無駄と悟ったようで、しぶしぶ従っ

て隣に座ってくれる。

「じゃあ、俺は何もしないからね」

彼は溜息混じりに言った。きつと、私を試す気なんだろう。望むところだ。

「いいよ」

私は挑むように答えた。

私の本気を見せて、惚れ直させてやるんだから。

まず、キスからだ。キスは経験済みだから大丈夫のはず。

夏木くん顔顔を近づけると、彼がじつと私の目を見つめてきた。見られるとやりづらい……。

自分からキスをするなんて、そういえば初めてだ。

私はさつと席を立つ。

「夏木くん、カーテン閉めていい？」

「どうぞ」

背後で彼がくすつと笑った気がした。

「怖気づいたんじゃないよ！暗い方がムード出ると思ったただけだから」

カーテンを閉めながら、必死に言い訳をする。

また彼が笑ったような気がした。

部屋がいい感じに暗くなり、今度こそ、と夏木くん顔顔を近づける。

相変わらず彼は非協力的で、目を閉じてくれない。

しかし、部屋の暗さにまだ目が慣れておらず、顔が先ほどのようにハッキリ見えないことで、私はどうにか口付けをすることができた。

は、恥ずかしい……！

でも、ここで恥ずかしくてたら駄目だ。

えいっと、彼の胸を押して、ベッドに倒れ込む。

唇が離れてしまったので、再度唇を合わせた。
気持ちいいかも。

柔らかい唇を感じながら、彼に抱きつき、体を密着させた。
そして、迷った挙句、舌を彼の口内にそっと忍ばせてみる。
舌が前歯に当たった。舌で歯をなぞっていると、彼の口が開き、
ぬるっとしたものが私の舌に触れてきた。

夏木くんの舌、だよな？ 何も言わなかったのに。

私は彼が応えてくれたのを嬉しく思いながら、舌を絡ませた。
本で見た時は汚いと思ったけど、彼とだったら汚いなんて全く思
わない。それどころか、彼の唾液は甘くておいしいとさえ感じた。
やがて彼の舌が私の口内に侵入してくる。上あごを舌で撫でられ、
ぞわっと鳥肌が立った。

今の感じ、苦手かも。

私ができ上がろうとすると、彼に抱きしめられて阻止された。
上あごを何度も舌で擦られ、ぞわぞわ感が止まらない。

唇が離れた時、私も彼も息が上がっていた。

私は力が入らず、彼の右肩に倒れ込む。

「……夕菜、やめてもいいんだよ？」

「嫌。やめないよ」

とはいえ、体が腑抜けになった私は、彼の首筋にキスをするぐら
いしかできなかった。

口付けた時、ふわつといい香りが私の鼻をくすぐる。

「夏木くん、石鹸の香りがする。シャワー浴びた？」

彼の顔がみるみる赤くなっていった。

やる気がなさそうに見えたけど、ちゃんと準備してくれてたんだ。
よし！頑張らなきゃ！私は俄然^{がぜん}やる気が湧いてきた。

キスの次は胸を触る、だったよね。

私は何とか上半身を起き上がらせる。下半身は彼に跨^{またが}って密着し

たまたまだ。

起きたのはいいが、太モモの裏に、何か硬いものを感じて首を捻^{ひね}った。

この感触、知っている。以前、中庭で助けてもらって抱き合った時と同じだ。あの時は結局何だったのか分からず仕舞いだったけど。

私は気になって、腰を浮かして下を覗き込む。

見ると、彼の股間が大きく盛り上がっていた。

これは……！

27. いざ日曜日！その2

夏木くんが勃起している！

衝撃の事実には私は愕然がくぜんとなった。

いや、これからえっちしようとしているんだから、そうならなくても
ならないと困るんだけど。

でも、こうして目の当たりにしてしまつと……。

私はまじまじと見ているのが急に恥ずかしくなつて、慌てて腰を
下ろした。

「うっ」

夏木くんが小さく呻き声をあげる。

「ご、ごめん！痛かつた？」

何も考えずに彼の上に座ってしまったが、ここは男性の急所だとい
うことに思い当たり、また腰を上げた。

「あ、ゆっくりだったら大丈夫だよ。今は普通に、腹が苦しかつ
ただけだから」

彼が私の腰に手を添えて、座る場所を誘導してくれたので、今度
はゆっくり腰を下ろす。

私の股の間に、ちょうど彼のアレがある。

なんかこれってイヤラシイ……。

とにかく次のステップに進むべく、私は着ていたパーカーとキャ
ミソールを脱ぎ、上半身は下着姿になった。

この日の為に、通販で買ったAAA65のブラジャー。爽やかな
水色で、レースと花がいっぱい付いてて、なかなか可愛い。と私は
思っただけど、この暗がりでは効力を発揮できないようで、彼は無
言だった。

少し気を落とすつつも彼の手を取り、胸に導く。

彼の大きな手のひらが、私の小さな胸を包んだ。

「……このブラ、触り心地がイマイチかも」
彼は申し訳なさそうに言った。

う。せっかく小さいサイズの可愛いブラを買ったというのに。

一回の注文で、自分に合うサイズなんてめったにないから、返品することも考慮して十種類ぐらい注文して、やっと手に入れたブラだというのに。

でも、彼の言うことも分からなくもない。

このブラ、厚みがすごい。

こうして彼に胸を触られても、あまり触られている感じがしなかった。

私は背中に手を回してホックを外し、ブラを取る。

胸はこの前来た時に見られているけど、やっぱりまだ恥ずかしかった。

だけど、暗いから何となくしか見えないはず。

私が彼の手を取る前に、勝手に彼の両手が伸びてきて私の胸を触った。

……ちよつと、夏木くん！

手のひら全体で胸を包み込み、優しく揉んでくる。

「夕菜の胸、最高……」

彼は囁くように言って、吐息を漏らした。

何だか、独りですっかり悦に入ってしまったって、私の存在が置いてけぼりになっているような気がした。

もしかして、また夏木くんおかしくなっちゃった？

不安を抱きながら、彼の様子をしばらく観察する。

「ひあつ」

指先で胸の先を引っつかかれ、私の情けない声が漏れた。

彼は何度もそこを攻めてくる。

「あつ、あつ、あぁ……んっ」

おかしい。変な声が止まらない。

彼に跨またがって接していると、じんじん疼く。

私は耐え切れず、腰を浮かして逃れようとした。

「ああんっ」

ひととき大きな声が部屋に響く。

逃れようとした私の疼くところに、彼が腰を突き上げてきたのだ。

胸を弄られ、下からも容赦なく突き上げられて、私は訳が分から

なくなつて、目をぎゅっと閉じた。

聞こえてくるのは、ベッドの軋きしむ音と私の変な声。

頭の芯がボーっとしてくる。

私は座った姿勢を保てなくなつて、彼の胸へ倒れ込んだ。

しかし、しつこく追ってくる彼の手は私の胸を弄り続ける。

下の方もリズムカルに擦れあつて、熱くてたまらない。

「な、夏木く……ん。ちょっと、待って……」

私は音をあげて彼に呼びかけるが、彼の返事はなかった。

「ま、待って、待ってつてば……」

何度呼びかけても、彼の耳には届かない。

やっぱり、またおかしくなってるんだね。

私はそう確信を持った。

早めに何とかしないと、また同じことの繰り返しになってしまう。

もし私が泣き出してから彼が正気に戻ったら、きっと別れ話を切り出される。

「待って……。ねえ、やめてつてば。……待って。……待て!!」

最後に言った「待て」は半ばヤケクソ気味に、強い口調で言った。飼犬のポチを躡けていた時を思い出す。

夏木くんはポチじゃないんだから、と自分でも呆れるが、意外なことに彼の動きは止まった。

嘘……。

彼の顔を覗き込むと、ひどく落ち込んでいるようだった。

「ごめん、俺またキレてた……」

「うん、キレてたね。だからお仕置きだよ」

私は彼の頬を軽くつねる。

「へっ？」

彼はまさか私がそんな事を言うと思っていなかったのか、キョトンとしている。

私は満面の笑みでもう一度「お仕置きしようね」と言いながら、起き上がった。

27. いざ日曜日！その2（後書き）

ここ数日、毎日更新していますが、明日は更新できないかもしれません。

さて、どうしようかな。

お仕置きといっても、痛いことは嫌だし……。

普通に夏木くんを許してもよかったんだけどね。

でも「俺は夕菜にふさわしくない」とか、また言い出しかねないし。

立ち上がった私は、上半身は裸で下はスカート着用という何とも間抜けな格好だった。

えっちの途中なんだから、しょうがないよね。

独りで言い訳しながら、スカートのベルト代わりのリボンをスルリと解く。

リボンは二重にしていたので、ちょうど二本あった。

「夏木くん。手を上にバンザイって、して」

ベッドに寝転んだままの彼に、にっこり微笑みかける。

「えっ？手？」

「そう、手を上に。あ、もうちょっと広げて。そのままストップね」

彼は怪訝な顔をしつつも、私の指示に従った。

「夏木くんは手癖がとても悪いので、今から手を拘束します」

「はいっ？」

彼は一瞬動揺を見せるが、特に抵抗はしなかった。

手癖が悪いのは事実だし、きっとまだ罪悪感でいっぱいなんだと思う。

私はまず、彼の右手首をリボンで縛って、ベッドの左の脚に括り付ける。

右手の拘束が終わり、次は左手に移ろうとしたところで、彼が私の左胸を舐めてきた。

「んっ」

すっかり油断していたので、思いがけない刺激に体がビクツと震える。

何で何で？さっきの今だよ？もうおかしくなったの？

「やあっ……」

彼は舐めるだけではなく、口で吸い付いてきた。

チュツと音を立てながら、赤ちゃんのように安らかな顔で吸っている。

そんな表情を見ると、呆れる一方で、よくこの薄っぺらな胸にそこまで夢中になれるものだと妙に感心してしまう自分がいた。

だけど、感心している場合ではない。

胸に刺激を与えられているのに、何故だか先ほどまで彼と触れ合っていた下半身も疼いてきた。ムズムズして落ち着かない。

普通、たくさん触られたら、鍛えられて平気になったりしないのかな？私、おかしいよ。触られれば触られるほど、変になる。

この感じ、苦手だ。夏木くんを止めないと！

「コラ！」

ちよつときつめに言って、彼のオデコにデコピンをかます。

お願い、元に戻って！

「イテツ。……ごめん」

正気に戻った彼は、益々しゅんとなつて落ち込んでしまった。

なんか、彼の扱い方が分かってきたかも……。

私はすっかり大人しくなった彼の左手首の固定も終わると、また立ち上がった。

あれ？

ベッドの左右の脚に手首を固定されて、自由を奪われた夏木くん……。

こうして見ると、自分のした事が何だか変態ばいような気がしてくる。

これってSMってやつじゃ……？

私は方向性のズレに眩暈を感じた。

違う違う。ムチとか口ウソクとか持つてないもん。痛いのは嫌だし、SMじゃないよ！

それに、彼は胸を触るとおかしくなっちゃうから、手出しできないようにするにはこれが一番だし。

自分の行いを正当化して、ひとまず心を落ち着ける。

とにかく次へ進もう。えっと、次は何だっけ？胸の次は……あつ、いよいよ最後のあれだ！

私はスカートを脱ぎ、潔くパンツも下ろして床に落とす。

とうとう、一糸纏まとわぬ生まれのままの姿になってしまった。

部屋は薄暗いので、ちよっと離れていれば、彼に私の体はシルエツトぐらいしか見えていないはず。

それでも、彼の存在を感じながらの裸は想像を絶する恥ずかしさだった。

うわぁ、恥ずかしすぎ！

夏木くんはさっきから何も話さないけど、どう思ってるのかな？

彼の顔の辺りを見ても、やはりこの暗さでは表情までは分からない。
い。

私はドキドキしながらも、彼の腰に跨またがろうと意気込むのだが……。

ああ！しまった！夏木くんは全く服を脱いでいない！

自分の迂闊こつぱんさに出端でたんをくじかれることになった。

一切、服を脱いでいない彼に対して、自分はすっぱんぼん。余計に羞恥心が煽られる。

慌てて服を脱がす為に彼のズボンに触れようとしますが、何となく上の服から脱がした方がいいような気がして、シャツのボタンに手を掛けた。

緊張して震える手で、下から一つ一つ丁寧にボタンを外していく。胸元の最後のボタンを外し終えた時、彼と目が合った。

彼は心配そうに見ている。

私は構わず、彼の唇に軽くキスをして、はだけたシャツの中に手を差し込んで背中に腕を回し、胸をくっつけてみた。

初めての素肌同士の触れ合い。

あまりの気持ちよさにウツトリとなった。

何これ。気持ちいい……。

すべすべした肌を撫で回して、彼の感触を味わう。

ほど良く引き締まった硬い体に、自分とは違う異性らしさを感じ、胸が高鳴った。

足も絡めようとして、彼がまだズボンを穿いたままだということ
を思い出す。

下も早いとこ脱がしちゃおう。

段々と私は羞恥心が欠けてきていた。頭の奥が霞がかってぼんやりしている。

のそのそと這って彼の腰まで後退し、ズボンに手を掛けた。

あそこが盛り上がっているせいで、なかなか脱がしにくい。

少々手こずりながらだったけど何とか脱がし、あとは下着のみになった。

トランクスのウエスト部分に手を掛け、一瞬だけ本当に脱がしていいのか躊躇^{ためら}うが、彼の抵抗が全く見られないことをいいことに続行する。

しかし、ズボンの時以上に引っかけた脱がしにくかった。

もう！一体どうなってるの？

よく見えないので顔を近づけると、私が下に脱がそうとする力と下着に引っ掛かっているアレが上を向こうとする力とが戦っているようだった。

えいっ！

力任せに一気にぐいっと下着をずらす。

やっと脱げた！と思った次の瞬間だった。

下着に引っ掛かって無理やり下を向かされたアレが、ビヨンと跳ね返ってきて、私の頬を打つ。

え？え？え？

29・いざ日曜日！その4

ぶたれた右頬を手で押さえて、呆然となった。

今、ぶつかってきたものって、夏木くんの股間のアレなの？ウソでしょ？ええっ？

思いがけない攻撃にショックを受ける私だったが、彼の股間を見て、更なる衝撃を受けることになる。

有り得ない！

初めて目にする男性の大きくなった姿は想像以上の大きさだった。あんなの入るの？

かなり怖気づいてしまった。でもよく考えると、女性のおそこは赤ちゃんが通れるようにできている。だから、それに比べるとあれくらいは楽勝なはず。

がんばらなきゃ！

しかし、気合の入った私とは逆に、彼の股間のものは萎んでいった。

あれれ？

だらんと下を向いてしまっている。

どんな仕組みなのよ、これ。

驚くべきサイズダウンをしたそれを、好奇心から指で摘んでみる。ふにやふにやだった。

何これ？気持ちいい。

私は柔らかい感触が気に入り、手で弄ぶ。

だけど、くにくにと楽しめたのも最初のうちだけで、あっという間に硬く膨らみ、振り返ってしまった。

……意味わかんない。
目の前で手品を見せられた気分だった。

まあ、いいや！次、いこう！

素早く彼に跨って、硬くなったアレを自分の中心へと導く。

このへんかな？

「ゆ、夕菜っ、まだ無理だよ！」

私が位置合わせをしていると、急に彼が焦りだした。

する前なのに、頭ごなしに無理だとか言われると、カチンとくる。

私は彼の言うことは無視して、握る手に力を込めた。

思い切って、腰を落とす。

「いつ、いつたあー！」

痛い痛い！めちやくちや痛い！

しかも全然入らなかった。

何故？位置が違ったのかな？

やっぱりちゃんと鏡で見て把握してくればよかった。何となく、

鏡で見たりしてはいけないような気がして、自分の体なのに、そこ

はずっと謎のままだった。

「も、もう一度……」

気を取り直して、再び挑もうとするが、

「夕菜、無理だって！俺の手の拘束外して！外してくれないんなら、

引きちぎるよ！」

彼が拘束に使ってるリボンを、実際に引きちぎる勢いで引っ張り

だしたので、慌ててリボンを解きに掛かる。

お気に入りのスカートのリボンをこんなことに使った拳句、ちぎ

られるなんてたまらない。

急いで結び目を解いた。

彼は起き上がって、自由になった手をポキポキと鳴らす。

私は横にちよこんと正座をして、彼の様子を見ていた。手の関節をほぐした彼は、胡坐をかいて、前髪をくしゃっと触りながら深く溜息をついた。

タイムオーバー？

結局、できなかった。あんなに大口叩いたくせにカツコ悪い。

私、これから振られちゃうんだろうか。

もう泣かないと誓ったのに、目が潤む。

ここまでやって駄目だったんだから、もう諦めるしかないよね。

今日の私はよくやったよ。今までの自分と比べると、有り得ないぐらい大胆だった。

結果は残せなかったけどね。

彼の言葉を待つ私は、まるでこれから死刑宣告を言い渡されるかのように絶望的だった。

緊張で手足が冷たくなる。沈黙がとても辛い。

「……まいった」

「え？」

彼の呟きが聞き取れず、私は首を傾げた。

「まいったよ、ほんと」

今度は聞き取れたが、彼がクスクス笑い出し、私は益々首を傾げた。

「夕菜、最高だよ！」

何がどうなってるの？私、褒められてる？振られないの？

「夕菜のこと、ちゃんと愛したい。駄目かな？」

彼が私に迫ってきた。もうちよっとで、キスしそうってところで止まって、私の返事を待っている。

どうして？えっちに失敗したのに。

彼が私の行動のどこに心を打たれたのかは疑問だらけだったが、そんなことよりも振られないことが嬉しくて胸がいつぱいになった。返事はもちろんOKに決まっている。

私は頷く代わりに、自分から軽く唇を触れ合わせた。

「胸にばかり夢中にならないで、私の事もちゃんと見てね」
唇が離れると、わざと冗談めかして言った。

「大丈夫。いざとなったら夕菜が止めてくれるし」
私たちは笑いあった。

さっきまでの茶番は、全く無駄だったわけではないようだ。
暴走した彼を、私は止めた。これはすごい進歩だ。

「すごく綺麗だ」

急に彼が熱っぽい目で私を見た。

そっだ、私、裸だった。こんな至近距離じゃ、暗くても見えてしまっ。

私は恥ずかしくなって、手で胸と股間を隠した。

うえっ。

手が触れた時、股間がぬるっと湿っていて、気持ち悪いことに気付く。慌てて手を戻し、付着したものを確認する。

暗くてよく分からないが、指先が謎の液体で濡れていた。

……？

とにかく、汚いよね。

「夏木くん、ティッシュちょうだい。いつ？」

彼が私の手を取って、汚れた指先を口に含んでしまった。

「き、汚いよ！」

私の抗議もむなしく、彼は平然と私の指を舐めながら吸っ。

あっ。

自分の体から力が抜けていくのを感じた。

そして、あっさり押し倒されてしまっただった。

30・いざ日曜日！その5<夏木視点>

しまった。

夕菜が濡れてると分かって、つい興奮してしまった。

もしかして、また引かせたかな？

しかし、押し倒された彼女は目がトロンとなっていて、気持ち良さそうだった。

彼女の様子に気をよくした俺は、指を舐めるのをやめて、唇にキスをする。

舌を入れると彼女も応えてくれて、濃厚に絡め合った。

彼女の感じる上あごを舌でくすぐるように撫でる。

最初は嫌がられるけど、しばらく続けると息遣いがすごく色っぽくなっっていくんだ。今日知ったことだけだ。

今日の彼女には驚かされてばかりだった。

正直、俺は夕菜をなめてた。

まさかここまでやるとはね……。

思い出すとおかしくてたまらない。

いじけてた俺の気持ちも、彼女の突飛な行動に解かされていった。例え俺がつまらない奴でも、彼女が面白すぎるから何とかなるよ。うな気にさせてくれる。

手を縛られたのは心底驚いた。

『俺は何もしないからね』とか言ったくせに、手を出しまくった俺が悪いんだけどさ。……いや、可愛すぎる夕菜とおっぱいがいいないんだ。

俺が暴走して、彼女が泣かなかったのもすごく意外だった。

暴走も止めてくれた。この事は何よりも驚いた。

俺の為に、彼女が変わってしまったのは残念なことだと思っていたが、変わっても夕菜は夕菜だった。天然とか、そういう本質的なところは変わらない。

今回の彼女の行動は、俺なんかの為にそこまでしてくれるのかと、感動させられてばかりだ。

彼女がどこまでやるのか、手を縛られてから俺は傍観者に徹していたわけだが、まさかあそこまで突っ走るとは……。

初めてなのに、いきなり挿入しようとするのにはびびった。しかも、生でだ。

避妊具を付けることにまで気が回らなかったのだろう。失敗に終わるのは目に見えていたが、万が一のことを考えて冷や冷やした。

今日の約束をしたあの日、特訓すると意気込んでいたけど、何の特訓をしたんだろう。

非常に気になった。

濃厚なキスの後の彼女の顔は壮絶に色っぽかった。

息が上がって、呼吸に合わせて胸が上下に動く。可愛いなあ。

上下するおっぱいを見ていると、触つてと語りかけてくる気がした。

軽くひと撫でしてやると、ぴくんと彼女が体を震わす。

ずいぶん敏感になったもんだよな。

わざと先端は避けて、その周りを撫でた。

乳首以外の胸を撫でながら、彼女の耳に唇を落とす。

「はぁ……」

耳も感じるようで、甘い吐息を漏らしてくれた。

耳の穴に舌をねじ込むと、彼女の全身が栗立つ。

首筋、鎖骨とキスを移動させながら、次は胸にいくか悩むが、腕の方にキスをした。

「夕菜、これどうしたの？」

柔らかかそうな二の腕に唇を落とそうとして、躊躇う。

彼女の腕には痛そうな青アザができていた。

「そ、それは……痛みに耐える特訓で、ちよつと爪つねったから……」
痛みに耐える特訓？……もしかして、処女喪失の為の？

俺は噴出しそうになった。でも笑ってはいけない。彼女は真剣な
んだから。

「痛い？」

俺は青アザをそつと舐めた。

「うっん。もう見た目だけなの。実際は痛くないから」

はにかむ彼女に俺は微笑み、早く完治するように願いを込めて、
丁寧にアザを舐めた。

彼女の腕を舐めながらも、相変わらず俺の手は乳首を避けて胸を
触り続けている。

小さいのに、ぷにぷにして気持ちい。おっぱい大好き。

しばらく俺が感触を味わっていると、彼女が物言いたげな目を向
けてくるようになった。

俺はまだキレてない。

彼女が言いたいことは予想がついている。

わざと触らないようにしている乳首。触ってないのに、さっきか
らぷっくりと大きくなっている。

触って欲しいんだろうなと思いつつ、周りを撫でる。

胸の先端に触れそうで触れない。それをしつこく繰り返す。

乳首に触れそうなら近い近付くと、彼女の呼吸が止まり、待ち構
えられているのを感じる。でも触らない。その瞬間の彼女のガツ
カリした様子がたまらなく可愛い。

ごめんね。今の俺はちよつと意地悪したい気分なんだ。

俺だつて今日は散々、君にいいように弄いじられたんだし、少しくら
いいいよね？

彼女にパンツを脱がされ、勃起したところをまじまじと見られたのは相当恥ずかしかった。緊張で萎えたところをしごかれて大きくされるし……。

今はしごいてもらわなくても、はちきれんばかりに大きくなっているけど。

もっと焦らして焦らしまくって、彼女自ら「乳首も触って」と言わしたかったんだけど、俺自身もじれったくなってきた。

ついに胸の先を指先で引っかく。

「あぁっ、あぁん、あっ、あぁっ……」

引っかくたびに、びくびくと彼女が体を反らし、色っぽい声を上げた。

右胸の先端を口に含み、ちゅっと吸う。彼女の口から気持ちよさそうな吐息が漏れたが、もっと激しく乱れさせたくて、軽く歯で噛んでみた。

「やぁんっ」

狙った以上の良い反応に俺は興奮して、甘噛みや、舌で転がしたりを繰り返す。

可愛いなあ。このまま食べちゃいたいよ。俺の口の中で、硬くなって自己主張する乳首。可愛すぎる。

いつも一緒にいたらいいのに。家でも学校でもどんな時でもおっぱいと一緒。ああ夢みたいだ。

彼女の喘ぎをBGMに、俺はどんどん自分の世界に入っていた。

はい。俺、暴走してます。

31・いざ日曜日！その6<夏木視点>

俺が妄想の中で、貧乳と結婚式を挙げている時だった。

脇腹をぎゅうぎゅうと締め付けられて我に返る。

何故か、夕菜の足に力二挟みされていた。

危な……。俺また意識飛んでたよな？正気に戻れてよかった。

力二挟みはわざと俺を戻す為にやったのかと思ったが、彼女の様子を見る限り無意識でやっているようだった。

「あつ、ああつ、んんっ……………」

今も尚、胸を舐められて感じている彼女には、考えてそんな器用な真似ができるとは思えない。

彼女は足で俺の体を挟み込み、下半身を密着させてくる。

そうか、そうだよな。胸ばかりじゃなく、そろそろ……………。

俺は胸を舐めたまま、彼女の下腹部に右手を滑らせようとしたのだが、何か手に握っていた。

何だ、コレ？

げげっ。いつの間に！

手にはどういうわけか、ローションを持っていた。

以前、付き合い始めた日に暴走して買ったやつだ。

そうそう、これ。このローションを夕菜の胸に塗って、魅惑のにゆるにゆるローションプレーを……………って、んなアホな！

こんなもん、しょっぱなから使えるかよ！

これはベッド下の収納の奥底に沈めたはず……………。どうやって、取り出したんだよ？

俺は彼女の目に付かないように、ゴミ箱目掛けて投げ捨てた。

もちろん彼女が帰った後で拾うけど。

自分の馬鹿さ加減に呆れつつも、彼女の胸への愛撫は怠らない。

左手で胸を揉みながら、今度こそ右手を彼女の下腹部へ……と意気込むが、驚きで手が止まる。

何気なく見た彼女の胸全体が、発疹だらけだったのだ。

これはひどい。せつかく透き通るような白い肌だったのに。一体何が？

しかし、じっくり見ると、発疹ではなく無数のキスマークだということが分かる。

誰がこんなことを！

……って、俺か！

うわあ、もう！どんだけ暴走してんだよ、俺。

彼女の綺麗な肌になんて事を……。こんなに跡を付けまくって。

限度ってもんがあるだろ！

自己嫌悪に陥りかけた俺だが、彼女が脚を絡めてくるので、落ち込んではいられなかった。

ごめん、夕菜。キスマークの件は後で謝るからね。

俺はようやく彼女の下腹部に手を触れた。

そこはもう十分に潤っている。

「わっ」

突然、彼女が色っぽくない叫びを上げた。

「そこ、触ったら駄目だよ！ぬめって汚いから」

俺の手を払いのけようと彼女の手が追って来るが、俺は空いてる左手でそれを阻止する。

「汚くないよ」

輪郭に沿って、上下に指を行き来させて、優しく撫でた。

ぬるぬるしてて、気持ちいい。

「ひいっ」

上の突起を軽く摘むと彼女がピンと爪先まで突っ張って、体を硬

直させた。

「やだ！触らないで！」

思いがけない彼女の非難だった。

あんなに俺に股間をすり寄せて、触って欲しそうだったのに。仕方がないので場所を変え、もっと奥へ指を進めた。

「痛っ！」

彼女の表情が苦痛に歪み、俺は慌てて指を戻す。

まだ、指の第一関節ぐらいままでしか入れてなかったんだけど。

さっきまで蕩け^{とろ}そうな表情だったのに、今の彼女は険しい不機嫌な顔つきで俺を見ていた。

「もしかして、ここ、自分で触ったことない？」

俺は不安になって聞いてみる。

「え？お風呂で洗う時は触るよ。そうしないと洗えないよね」

彼女は怪訝そうに答えた。

そっか。多分、本当に洗うだけで、慰めたりしたことがないんだろう。自慰なんて存在すら知らないのかもしれない。もし知ってたら、俺の質問にもっと恥ずかしがりそうなもんだし。

「ね、特訓でどんなことしたの？さっき、痛みに耐える特訓は聞いたけど、それ以外は？」

彼女の知識のレベルを計るために探りを入れる。

「本で勉強したぐらいだけど……」

「本って、どんな？」

「えーっ。どんなって、えっちな本だよ。本屋で買おうとしたら、田中くんがいたから、結局パパの本をこっそり見たんだけどね」

……おいおい、父親の本って。

もし俺にいつか娘が出来て、その娘が俺の工口本を盗み見てたら、ショックだよなあ。俺は絶対、娘には見つからないように厳重に隠すことにしよう。ま、夕菜のお父さんだから、相当うっかり屋さん

なんだろうけど。

それと余談だが、田中が数日前に夕菜が成人コーナーから出てくるのを見たと言っていた。俺は何かの間違いだろうと笑って済ましてんだけど……、マジで行ってたんだね。

「で、どんな内容だったの？」

「ええっ？内容？もう今日の実践で全部出し切ったよ」

彼女は結局失敗に終わったのを悔やんでいるのか、浮かない顔で溜息をついた。

実践で出し切っただと？今日の夕菜のしたことって、かなり無茶苦茶だったよな。

デタラメな本、読んでんじゃねーよ！夕菜のオヤジ！

何故か怒りの矛先が彼女の父親に向いた。

とにかく今の質疑応答で、彼女の性的知識の引き出しはもう空っぽだということが分かった。

ということは、俺がリードするしかないよな。

32・いざ日曜日！その7<夏木視点>/<夕菜視点>

<夏木視点>

うまく最後までもっていけるだろうか。

自信ないな……。

昔、トラウマの原因となった先輩と付き合った時は、俺に主導権はなく、ほとんど一方的にやられっぱなしだった。思い返せば、すべてが騎上位。いつも先輩本位のセックスで、まともに愛撫したことなくないかも。

さっきの夕菜の拒絶を見る限り、多分、俺は触るのが下手なんだ。

とりあえず、この白けた雰囲気を感じに戻さないとな……。

俺は下の方を触るのは一旦諦めて、夕菜を抱きしめた。

彼女も俺の背に手を回して応えてくれる。

はぁ。すごい幸せ。こうして彼女と裸で抱き合える日が来るなんて。

もし別れてたら、こういう幸せを知らないままだったのか。

「ありがとう」

気付いたら、自然と感謝の言葉が口から出ていた。

「え？何が？」

「別れ話なんかした馬鹿な俺のこと、引き止めてくれて本当にありがとう。大好きだよ、夕菜」

「わ、私も夏木くんが大好き」

彼女の腕に力がこもった。

俺も力いっぱい彼女を抱きしめる。

華奢な彼女は俺の腕の中にすっぽりと納まって、抱き心地がすごい。しっとりすべすべな背中を撫でまくった。

可愛い貧乳は俺の胸にペタッと押しつぶされている。

「……気持ちいい」

彼女がうつつりと呟いた。

「うん。気持ちいいね……」

俺は微笑んでから、彼女の唇に口付けた。

濃厚なキスを交わしながら、胸を触る。

彼女が感じている姿に逸る^{はや}気持ちを必死に抑えながら、右手をそーっと下の茂みへ忍ばせた。

慎重に、慎重に……。

細心の注意を払い、軽く触れるか触れないかぐらいの力加減で突起を上下に撫でた。

最初のひと撫での時、彼女の体が震えたが拒絶はされない。

よっしゃ！やればできる。俺は心の中で自分を褒め称えた。

どうやら、最初に嫌がられた時は触り方が強すぎたようだ。

女の子って繊細なんだな。

キスをしながら左手で胸を揉み、右手は力加減に気をつけて下腹部を触る……。何て忙しいんだ！

下手な分、俺の出来る精一杯のことをしようとしたら、こうなっ
てしまった。

3つの事を同時につて難しいな。キスはそろそろいいかな？ 声

も聞きたいし。

「ああんっ、あっ、あぁっ……」

唇が離れた途端、彼女の喘ぎ声が漏れる。

やっぱ可愛い！下の方も感じてくれてるのかな？

彼女の色っぽい表情を楽しみながら、俺は触り続けた。

俺も、彼女の中で気持ちよくなりた……。

気持ちよさそうな彼女の様子を見ると、劣情が煽られて、つい指を奥へ進めてしまう。

すごい。さっきより濡れまくってトロトロだ……。

これなら指ぐらい入るのとは思いい、ゆっくり入口を押しした。

「そこ、違つと思う!」

急に彼女が大声を出し、俺は硬直する。
違つ?何が?

「場所、間違つてるよ!」

んん?意味が分からん。

彼女の股間を覗き込もうとすると、彼女の両手が俺の頭を掴む。

「夏木くん、何する気?」

「とりあえず見て確認しようかと……」

「そんなとこ見たら絶交だよ!」

彼女は顔を真っ赤にして、俺の頭の動きを封じた。

理不尽な……。夕菜は俺のをじろじろ見たくせに。

しかし、ここで彼女の機嫌を損ねると元も子もないので俺は我慢した。

「間違つてるって何が?」

話しながら、指を沈めようとしてクチュツと水音がたつ。

「だから、そこ。……穴じゃないと思う」

「ええっ?」

一瞬驚くが、どう考えても俺は間違っていない。その証拠にここからたくさん溢れ出ている。

「……もしかして痛い?」

恐る恐る聞いてみた。

「痛いとまではいかないけど、そこは違つと思う」

よかった。痛くはないのか。

だが、何故か違つと言って断固として譲らない彼女。
どうしたらいいんだ。

「やつ……あぁっ……」

俺は問題は後回しにして、突起の方をいじくることにした。

こっちは大分気持ちいいみたい。よかった。

もっともつと彼女を感じさせてから、再チャレンジだ。

俺は熱心に弄り続けた。

どれぐらい経った頃だろうか。彼女の喘ぎが切羽詰った感じに変わったかと思ったら、

「あっ、ああっ、やあああっ……………」

ビクビクと体を痙攣させて…………絶頂を迎えたようだ。

夕菜がイッた…………。俺の心は達成感に満ち溢れていた。

彼女は肩で息をしながら、俺にしがみ付いてきたので、俺も抱きしめ返す。

彼女の体はしつとりと汗ばんでいた。

イッた余韻が抜けきらないのか、頬が上気しててエロい顔をしている。

「すごいよ！何か今すごかったの！」

興奮冷めやまぬ口調で、彼女が早口で捲くし立てた。

俺は腕の中の彼女の頭をよしよしと撫でる。

多分、初めてイッたんだよね。

俺は嬉しさで顔がニヤつくのを止められなかった。

夕菜可愛すぎ…………。

しばらく彼女の頭を撫でてまったりとしていた。

でも、そろそろ俺も気持ちよくなりたくて、彼女の様子を窺う。

夕菜。俺、もう我慢できないよ！

しかし…………。

スー。彼女から安らかな寝息が聞こえてきたのだった。

…………寝てるのか？嘘だろ！

ありがちな展開に思わず涙ぐむ俺。

彼女の寝顔はまるで天使のようで、邪な気持ちで起こしてしまうのは躊躇ためらわれた。

今日はもう無理だ。

時計を見て溜息をつく。

あと一時間半でところだな。ギリギリまで寝かせてあげるとするか。

いいさ。俺と彼女はまだ始まったばかりなんだ。これからいくらでもチャンスはある。……たぶん。

彼女の無防備な寝顔を見ると、思わず笑みがこぼれた。

「愛してるよ」

彼女のオデコに……ではなく、胸に口付けた。

俺、やっぱり変だよな。普通はこういう時、オデコとか頬にキスするんだろうけど……。

もちろん、今の愛の囁きは彼女自身に向けて言ったものだ。

でも……ああ、貧乳いいよね……。夕菜の胸は最高だよ。

「愛してる」

もう一度、胸に口付けていた。

<夕菜視点>

こんな自分知らなかった。

夏木さんに触れられると何も考えられなくなる。

最初は嫌だと思った所も、触られるうちに熱くてたまらなくなつて、夢中になった。

触られ続けて、気持ちよすぎておかしくなりそうだと思つたら、本当におかしくなった。爆発したみたい。

「すごいよ！何か今すごかったの！」

何だかすごく彼に抱きつきたくて、ぎゅっとしがみつく。
優しく頭を撫でられ、彼の匂いを嗅ぎながら夢見心地になった。
体がフワフワする……。

そして、私は眠りに落ちた。

「……………るよ」

遠くで愛しい彼の声がする。

私は重いまぶたを必死に持ち上げ、薄目を開けた。
うつとりと私の胸を見る彼がいる。

「愛してる」

彼が優しく微笑んで、胸にキスをした。

ちよつと待つてよ！

私に対しては『大好き』止まりなのに、胸には『愛してる』とか
言っちやうわけ？

げんなりしながら、私は深い眠りに落ちていった。

32. いざ日曜日！その7<夏木視点>/<夕菜視点>(後書き)

次回で終わりです。

33・その後<夏木視点>

夕菜と最終的に結ばれたのはそれから半年後だった。

彼女の天然発言に振り回され、なかなか最後の砦を触らせてもらえなかったのだ。

それと「貧乳さえあればいいんでしょ」と揉める事、数回……。

しかし、そんな俺たちも交際7年を経て結婚した。今では彼女は妊娠8ヶ月目でお腹もかなり目立つ。もうすぐ待望の赤ちゃんが産まれるのだ。

「早く産まれて来いよー」

彼女のお腹に俺は話しかけた。こうして話しかけるのは、もはや日課になっている。

「まだ早いよ」

呆れながらお腹をさする彼女は、時折母親の顔を見せる。

「産まれたら、ちゃんとママのおっぱい吸って、栄養奪って、貧乳に戻してくれよー。頼むよー。できたら今すぐにでも」

「ちよつと！俊哉くん！」

お腹の子に変な事を言わないで、と彼女は怒ってキッチンへ行ってしまった。

あ、もうすぐ昼食の時間か。

俺も手伝おつと。

彼女の後を追ってキッチンへ向かう。

子どもが出来たのはすごく嬉しい。これは本心だ。

でも彼女の胸が……俺の可愛い貧乳が……Cカップになってしまった！

シクシク……。何度、枕を涙で濡らした事か。

いや、貧乳じゃなくなっただからといって、彼女への愛は全く変わ

らないけどね。

でも、やっぱり、恋しいよ。

本当に出産したら元に戻るんだろうな？

まあ、今は今で楽しんでるけど。

昨晚の情事を思い出し、俺は幸せに浸るのだった。

33・その後<夏木視点>（後書き）

最後まで読んで下さった奇特定の皆様、本当にありがとうございました。

最終回が近いと感じてからラストスパートをかけて、頻繁に更新したのですが、目分量誤りました。思ったより時間がかかって、今とても息切れしてます。

伏線を張ったまま回収しきれなかったところもあつたりして、ボロボロなんです。今の自分ではこれが精一杯です。もし書き直すなら、脇役の話をもうちよつと書き加えたいところですが、しばらくはそつとしておきます。

視点を変えて書くのに慣れて、何となく二人の視点を書いてしまいました。作者の腕が足りなかった為、ごちゃごちゃした感じになってしまいました。

そして、夏木の暴走以前に、作者が暴走してどんどんエロい展開に……。苦情がこなかったのでR15の域を超えなかったと考えてよいのでしょうか。

宣伝ですが、『不可解な人』という作品を細々と連載中です。高校生の恋愛ものです。実はこの話の方が初めて書き始めた作品なんです。何故か『貧乳LOVE』が先に完結しましたが、もし、暇で暇でたまらない方は気が向いたら、読んでみて下さい。読んでも何のメリットはありませんが、単に作者が喜びます（笑）。

『不可解な人』はR15ですが、今後は全年齢対象で異世界召喚ものも書いてみようかと思っています。好きなんですよ、異世界。執筆って楽しいですね。下手の横好きですけど、いろいろ書きたくなってきました。エッセイとかもいつか挑戦したいですね。

最後までお付き合い下さって本当にありがとうございました。

五月もちこ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8881e/>

貧乳LOVE

2010年10月8日12時53分発行